

# 舟江の六光

新潟盲学校同窓会創立60周年記念  
第100号

新潟盲学校同窓会創立70周年記念  
第106号

合冊復刻版

令和元年6月16日発行

## 記念誌復刻版発行にあたり

新潟盲学校同窓会創立110周年記念事業の一環として、本会記念誌「舟江の六光」創立60周年記念誌、並びに創立70周年記念誌を合冊して編集し、復刻版として発行することとなりました。

創立60周年記念誌は本誌発行100号となる記念誌であり、昭和46（1971）年12月20日発行です。また、創立70周年記念誌は昭和56（1981）年12月20日発行です。合冊した記念誌は、発行から60周年記念誌は50年、70周年記念誌は40年それぞれ経過しました。この間、社会は大きく変貌し、視覚障害者を取り巻く環境も変化してきましたが、同窓生の繋がりはゆるぎないものと信じています。

記念誌や会報の発行は、本会にとり会員や教職員の絆であり、消息であってもその行間からは生き生きとした鼓動が聞こえ、お互いの生き方に大きな示唆と励ましを与えてくれるものです。内容は、在学中や在勤中の思い出が主なものですが、各時代を生きた人々の証言であり、当時の様子や一人一人の思いや願いが綴られており、読者の心を揺さぶります。この貴重な遺産を、後世に文字として伝えおくことは誠に意義深いものと考え、この度の発刊の運びとなりました。

さらに、記念誌公開は会員のみならず、世間に披露し皆様の高覧に供したり、後輩への師表となるべきものと信じています。そのため、この度は、2冊の記念誌が発行時に点字版のみ発行されていたものを、点字版に加え活字版と録音版も発行し、共生社会に向けて広く情報共有するものです。

編集・校正に当たり、元同窓会長・和田光雄様、元校長・小西明様から多大なる御尽力いただきました。深甚なる謝意を表します。

同窓会の更なる発展充実、並びに同窓生のますますの御活躍を祈念し、記念誌復刻版の挨拶とします。

令和元年（2019）年6月16日

新潟県立新潟盲学校同窓会  
第16代会長 渡辺利喜男

# 舟江の六光

第100号

新潟盲学校同窓会創立60周年記念  
本誌発行100号記念

昭和46年12月20日発行

## 目 次

「本会創立 60 年の回顧」	東條 末次郎	・・・・・・	P1
「記念号に寄せて」	塚本 文雄	・・・・・・	P3
「在勤中の思い出の数々」	芹沢 勝助	・・・・・・	P5
「思い出と感謝と」	小杉 茂作	・・・・・・	P7
「楽老家」	小熊 奈嘉治	・・・・・・	P9
「生活のサイクルを変えて」	樋口 政枝	・・・・・・	P10
「思い出の中から」	星 淑子	・・・・・・	P12
「道」	渡辺 幸栄	・・・・・・	P13
「遠い日の絵空事」	笠原 工嗣	・・・・・・	P14
「金鉢山の回想」	中川 童二	・・・・・・	P16
「学生時代の思い出」	本間 國雄	・・・・・・	P17
「溝口先生の思い出」	堀 澄	・・・・・・	P18
「思い出」	中島 禧岡	・・・・・・	P20
「60周年を記念して歌三首」	中村 松治	・・・・・・	P21
「砂山日記」	捧 梅次郎	・・・・・・	P22
「随想」	渡邊 信一	・・・・・・	P24
「専任初代の校長を語る」	東條 末次郎	・・・・・・	P25
「創立60周年記念寄付者氏名」「記念総会並びに式典」			・・・・ P27

## 「本会創立 60 年の回顧」

同窓会長 東條 末次郎

本会の創立は今年で満 60 周年を迎えることになりました。顧みれば、その歩みは決して平坦な道ではなく、険しい道でありました。私はこの歩みを、創立から昭和 2 年までを第 1 期、昭和 2 年から後を第 2 期として筆を進めたいと思います。

第 1 期。本会の創立は言うまでもなく明治 42 年であり、当時卒業生は一人もいませんでした。したがって在校生だけで会を組織したことになります。本当なら、校友会とか生徒会とか言うべきであったでしょう。それを同窓会と名付けたのはどういう意味であったか、知る由もありません。この記録は、記録簿に綴じて本会専用の長筆笥に収めておいたのでありましたが、終戦の疎開騒ぎで無くなってしまいました。昨年の評議員会において、「創立満 60 周年記念式」をどうするかという討議の際、「卒業生がおらないのに同窓会というのはおかしい。おそらく創立は明治 45 年であろう。当時、盲学校は 5 年制であったから本校の創立が明治 40 年、それから計算すれば 45 年には卒業生が出ることになる」という意見が多数を占め、そのように決定したのであります。

それはともかく、在校生の会費は順調に集まるが卒業生の会費は集まりが悪く、会の財政ははなはだ苦しかったのであります。その時、会費は年額 1 円 20 銭であったから高いというのではないが、郵便局まで出かけて小為替を組んで送金をするという事は、不自由な者にとって容易なことではありません。ことに田舎に住む者は、局が遠いため送ろうと思いつつながら 1 年延ばしに延ばし、ついに未納ということになるのであります。そこで私たち生徒は、八島会長の命を受け、日曜を利用し、会費を集めるために市内在住者の家庭を幾度訪問したことでありましょう。

しかし、大正 10 年に学校を県に移管するため、学校関係者と同窓会が協力して運動した時、その費用の一部を卒業生から募金致しました。ところが思いのほか多く集まって、関係者を感激させたことは、今も私の記憶にはっきりと残っております。そしてその運動が実を結び、大正 11 年に県立となったのであります。

第 2 期。名実共に本会の発足は昭和 2 年ということになりましょう。それまでは在校生と一緒に会を運営したのでありますが、八島会長、板谷行二郎、橋本國蔵、齋藤良太氏らの努力によって、校友会と同窓会とに分離したのであります。その記念として、母校へ校旗を寄贈したことは皆さまご承知の通りであります。

その後、会の運営について研究し、その結果、現在の終身会費制に改め、他方、基本金を積み立てて将来に備えることになったのであります。その基本金を、利率の高い株を選んで購入(満鉄株 15 日本発送電株 20)したのでありますが、残念なことに当時最も優良株と言われていた満鉄が、終戦と同時に影も形もなくなっただけであります。しかし、日本発送電が東北電力となって、今の基本金の基となったことは心から喜びにたえません。

以上、本会の歩みとその歴史のあらましを述べました。その歩みは文字通り茨の道であったが、産まず弛まず歩き通し、ついに今日の発展を見るに到ったのであります。これも各位の愛会心の賜物であると深く信じて止みません。ここに創立満 60 周年を迎えるにあたり、さらに会発展のため一致協力することを声を大にして誓おうではありませんか。

## 「記念号に寄せて」

同窓会顧問 塚本 文雄

新盲同窓会は明治 42 年校友会と卒業生が一緒になって同窓会を創立。会長には故水野眞吾さんが就任。第一歩を踏み出したと申されています。本会運営のため、会費だけでは困難ゆえ、大正 15 年、基本財産を作るよう努力することになりました。年をおうて会員も増し、校友会と一緒に同窓会組織について検討。同窓会は卒業生をもって、昭和 2 年、校友会と分かれることになりました。その折、母校の発展と後輩の成長を祈って京都西陣の校旗 1 流を母校へ贈りました。40 余年の現在まで、母校の諸式典には「朝日に輝く六つ星の校旗」を樹立し、同窓会と母校が一体となって歩んでいる姿のシンボルとして仰いでおります。このとき、母校教諭 故八島権三郎先生が、会長として本会の発展と母校後輩の教育に尽くされました。

学校長の会長就任は、7 代樋口嘉雄先生の昭和 10 年以降で、8 代小熊奈嘉治先生、次いで 9 代の私が昭和 22 年、推されて会長に、副会長には東條、佐々木、加藤の諸先輩が就任。会員各位の協力を得、本会創設の趣旨を生かしながら運営してきました。特筆すべき事業として、昭和 34 年の創立 50 周年記念として(1)会員名簿の作成 (2)基本財産の拡充 (3)表彰並びに感謝状贈呈 (4)七色劇団鑑賞 (5)園遊会などに記念寄付金、300 余名の賛同を得、9 万 5 千円をいただき、記念諸事業盛会裏に進み、さらに基本財産として東北電力株 300 株となり、諸先輩の悲願であった本会の健全財政への一歩を進めることとなりました。

昭和 42 年、母校山ニツへの移転改築竣工式ならびに創立 60 周年記念式典には、本会は PTA と一体となって記念事業遂行に尽力。記念寄付 426 名の賛同を得、総額 31 万余円におよぶ多額の寄付が寄せられました。そのうち母校へは 25 万円が寄贈されました。

昭和 5 年より 37 年までの関屋金鉢山時代、中庭の百日紅、椿、松、もみじなどの庭木の一部と庭石の大部分を山ニツへ運び、同窓会寄付 25 万円を基礎に学校移転改築記念の造園を長生園に依頼。教職員、児童生徒、全校あげて土運び、山築き、奉仕。ここに同窓会、学校一体の伝統に輝く同窓会記念庭園の造園事業を行いました。その後、芝生や草木の植え込みなど先輩より送られた憩いの庭。新緑の 5 月。校内美化のシンボルとなっていることはご同慶に耐えません。

昭和 46 年、東条会長の下、役員会員各位の協力によって同窓会創立 60 周年の記念事業が進められますことを嬉しく存じます。60 年といえば「人生の還暦」。

本会も還暦を迎えることとなり、本会も昭和 45 年末、会員 1016 名（うち物故者 191 名）を数え、本年秋、記念式典をはじめ各種の記念事業が行われますことは、母校教職員児童生徒一同と共に心から慶賀申し上げる次第であります。

本会が諸先輩の業を継いで常に目的の達成に邁進。会員各位の各方面でのご活躍。母校と一体となつての諸事業の推進など、会員各位と共に誇りとすべきであります。

終わりに、60 周年にあたり、物故せられた諸先輩のご冥福を祈り、会員各位のいよいよの御多幸を念じ、終わりに本会並びに母校の繁栄発展を祈念致します。

「在勤中の思い出の数々」



桜の蕾も膨らみかけた肌寒い3月の末、東京に生まれ、東京に育った私が初めて東京を離れる日、上野駅に母が見送ってくれた。雪国の新潟に赴任の日、心細さと寂しさが交差して涙が滲む。新調の晴れの背広服に胸を膨らませての赴任のはずが、なんとも物悲しさが先立った。水上を出て清水トンネルを抜けると白一色の雪雪、宮内長岡は粉雪だった。ようようと雪国に来たという孤独感が身にしみた。新潟駅には塚本先生が寒いホームに出迎えてくれた。本当に嬉しかった。それからもう早いもので30有余年の月日は流れた。しかし不思議に鮮明に、今もなお私の脳裏に赴任の日の遠い昔の思い出が蘇ってくる。

土地不案内で、何かにつけて不慣れな私を、何かと弟のように身の回りのことに心を配っていただいた塚本先生のご親切、関屋の念仏寺前の寺尾舎での下宿生活も、今思えば懐かしい思い出のひとつだ。毎朝の朝礼。澄みきった青空。海辺の松林。長閑にカッコウが鳴く。運動場で少々しゃがれたさび声の樋口嘉雄校長の優しく諭すような訓話。八の字ひげの高橋幸三郎教頭、東條、八島両大先輩の先生方、教務主任の小杉茂作先生。皆さん親切で、未熟不慣れな私にとってはかけがえのない立派で温かい心遣いをして下さった先生方だった。

当時、まだ自分自身さえ充分自立に自信がないのに舎監を拝命。担当舎生の生活指導にはずいぶん苦勞した。しかし舎監長會田先生、舎監の牧野、塚本、樋口政枝先生方のよきご指導で、大過なく任を全うした。特に舎務については樋口政枝先生に一から十までお世話になった。お世話になりっぱなしで何の御礼もできず今日に至っている。申し訳ない次第である。

私が新潟盲に勤務したのは、昭和14年4月から12月末まで僅か9ヶ月の在勤であった。この9ヶ月の印象は今なお私の胸の中に生き生きと燃え続けている。春の山の下チューリップ。加治川の桜。イカが泳ぐのを初めて見たのは越佐盲人会の会合で高橋幸三郎、東條末次郎先生方に案内されて直江津に出張した時のことだった。春日山の城址にも登った。夏はうち続く砂丘を背に海水浴。泳ぎの不得手の私もけっこう生徒と共に楽しんだ。こんな楽しい毎日ではあったが、今もなお夢に見る苦い思い出もある。

寄宿舍の南京虫退治と硫酸会社の黄色い煙。クロロピクリンという第一次世界大戦で毒ガスに使用したという劇薬が、南京虫の殺虫剤に活用されることを知ったのも新潟盲での尊い体験のひとつ。寄宿舍の中庭にコンクリートの大きな穴を掘って、畳を積み上げ密封して消毒する。2・3日して封を切ると、目にしみて涙が流れるほど激しい薬の臭いの中で畳に巣食った南京虫が何百というほど死んでいる。この夢に時々悩まされた。

吹雪いて道もわからぬほど積もった雪の朝、校門の近くの木の枝でチリンチリンと鈴が鳴る。吹雪いていても盲生徒に校門の位置がわかるようにとの細かい学校側の配慮だった。

「新潟はよい所だ。美人の国だし、歌の島佐渡はあるし、立派な先輩が勤務している。一生勤めよとは言わない。東京だけしか知らなくてはだめだ。地方の現場もよく見、2・3年頑張ってきて来い」当時、私の母校、東京盲学校長片山昇先生が新潟赴任にあたって激励してくれた言葉だった。結果は1年も勤めないで帰ったが、今振り返ってみて、本当に書生の第一歩を新潟で過ごしたことに感謝している。それは、新潟の自然もさることながら、教員室、舎監室、そして教室での先生、生徒諸君が温かい心で私に接してくれた数々の賜物であった。この尊い体験は、今も私の生活の中に生きている。

新潟を去り、呼び戻されて、軍事保護院で失明軍人の更正指導を6カ年。苦労も多かったが、大過なく勤めえたのも新潟での尊い体験があったからこそと思う。終戦。軍事保護院の廃庁解散。東京盲学校への復籍。学制改革。東京教育大学への組織替え。いつも良き盲学校の現場教師たらんと心がけた私は、時代の流れの中で好むと好まざるとに関わらず「大学人」として再び振り出しに戻って再出発することになった。

昭和24年、現場での教育経験が買われて、専任講師を振り出しに10年間の長い苦しい研究生生活の連続であった。34年7月、助教授に。36年3月に学位を得、39年4月、教授に昇任して、ようやく辿り着かねばならない茨の道を踏み越えては来たものの、近頃度々遠い昔の長閑で楽しかった新潟での思い出が、夢となって甦ってくる。

振り返ってみると、私ももう五十の坂を越えた。当時親しくご指導を頂いた新潟の懐かしい先生方も、あるいは逝き、あるいは職を退いて余生を楽しんでおられるようである。やがて私もその道を辿ることになるが、敬愛する塚本文雄先生は今もなお健在。立派な新校舎も落成し、学校は名実共に充実し、ますます発展しつつある。

同窓会創立60周年を迎えるにあたり、会員各位のご健康とご多幸とを祈ると共に、大きな感慨をこめて60年の還暦をお祝いし、今後の限りなきご発展を心から祈念して筆を置く。

## 「思い出と感謝と」

小杉 茂作

先般、同窓会から創立 60 周年記念号に寄稿するようにと誠に光栄のお手紙を戴きました。お髭の東條先生が会長として活躍され、実に懐かしく、かつ喜びに耐えない次第です。

私は昭和 12 年 2 月、まだ越後には雪もだいぶ厚い頃、初めて上越国境を越えて新潟盲学校に赴任しました。それから 18 年 5 月まで満 6 力年間、多くの皆さんにお世話になりました。新潟をあとに郷里静岡へ帰ってすでに 28 年になりますが、6 年間の新潟の生活は、私の生涯にとって何十年間に渡って重ねた経験にも比する実に貴重な時代であったことを喜んでおります。愚妻も私と共に苦労を積んでくれましたが、年を経て、なおかつ新たな懐かしい思い出を持っております。

私は新潟盲学校を去る時に「私は静岡へ帰っても新潟盲学校の発展を遠くから念じ通すことでしょう。同時に、私は静岡盲学校が新潟盲学校に負けない学校にするために全力を尽くすことでしょう」と申したことを思い出します。当時は大東亜戦争のさなかで、静岡へ来ましてからは、戦況は日一日と悪化して連日の空襲。学校経営は極度の困窮に追い込まれました。20 年 8 月、終戦となり、その後社会変革。これに伴って教育の大改革、施設教育内容の変転等々目まぐるしい幾年かでした。しかし重なる苦難の中に立っていつも思い出され力づけられたのは、新潟盲学校当時の校長樋口嘉雄先生、教頭の高橋幸三郎先生から受けた薫陶でした。

樋口校長の教員指導は、時に過酷なものがあり、ことにあたって断固たる態度をとられました。しかし他面、温情慈父のごとく綿密母のようでもありました。高橋先生は全盲教員として博学。向学心に富み、実に豊かな人格。あたかも大海のごとき品格をもって、多くの人を温かく抱擁する雅量を持たれておりました。私は、樋口校長から学校経営の柱を、高橋先生から盲人教育の方向付けを与えられました。

静岡盲学校 18 年、浜松盲学校 6 年。私も小さな苦労を積み重ねてまいりましたが、その苦難を切り開き前進する原動力は、新潟盲学校によって基礎付けられたことを顧みて、深く感謝しております。

先年、創立記念式にお招きを受けて山二ツ新築校舎を拝見し、その内容と設備の充実しているのに驚きました。塚本校長は私と同じ年に赴任され、遠大な計画をもって学校発展のために尽力され、全国屈指の盲学校を完成され、誠に敬服のほかありません。

越後には早くから越佐盲人会があり、全国に先駆けて盲人福祉に活躍され、また盲学校同窓会も確固たる基盤をもって母校とその歩みを共にし、ますます発展しつつあることは実に欣快にたえません。終わりに会員各位のご健康とご発展をお祈りし、筆をとどめます。

## 「楽老家」

小熊 奈嘉治

盲学校へもすっかりご無沙汰しており、申し訳ありません。ようやく陽春の候桜も散り終ったと言うに、老いの悲しさ、まだまだ一日中炬燵にもぐりきりの生活で恥ずかしいしだいであります。

記念号に何か寄稿せよとの言い付けで色々考えてみましたが、さっぱり思いもまとまらず困ってしまいました。もう今日が締切日、途方にくれ、平素の手遊びの腰折れ歌を少々書き連ねて席ふさぎをさせてもらうことにしましたが、お許しを願います。老いの楽しみを読める 10 首、今年 2 月 25 日は我が 80 回の誕生日。当日、東京近郊の次男宅にて誕生パーティーを催してくれたらば、その席上にて負け惜しみ半分にて詠んで披露せるものなり。

別れ住む 孫子らのもと めぐりに  
訪ねめぐるが 老いの楽しみ  
幸せに 目鼻足腰 なおさして  
さわりあらぬも 老いの楽しみ  
五坪の庭に 木を植え 石配り  
小池見取るも 老いの楽しみ  
旅費惜しみ 惜しみながらも おちこちと  
旅行くことも 老いの楽しみ  
今もなお 下手の横好き 短歌もじ  
うろたしなむも 老いの楽しみ  
生き残る あっちこっちの 友達と  
便り交わすも 老いの楽しみ  
内外の 目まぐるしくも 変わりゆく  
様見ているも 老いの楽しみ  
朝々の 目覚むる床に あれやこれや  
思い耽るも 老いの楽しみ  
子ら孫ら 皆つつがなく 己がじし  
務めいるこそ 老いの楽しみ  
いつ死ぬも 後に何とて 気にかかる  
ことのあらぬぞ 老いの楽しみ

## 「生活のサイクルを変えて」

樋口 政枝

手作りの 青菜たくまし それぞれに  
越境しつつ なおも競える

今日は天皇誕生の日。尚早の雨がようやく原稿用紙に向かわせてくれるペンを  
鍬に替えて（ちょっと大仰でお恥ずかしいことですが）もう4度目の4月を送  
ろうとしている。4月の生命力の逞しさは恐ろしいほどである。畑の雑草もさる  
ことながら、去年の暮れに魚屋さんからいただいた30株ほどの唐菜の素晴ら  
しいこと。それが穀雨と称する春雨によって潤されるその成長ぶり、老いの身内  
にも何か熱いものを感じられる。そんな時は何もかも捨てて裏へ出てゆく。そし  
て畑の中の人となり、満足感を味わうのである。

喜びは 我が手作りの 青菜をば  
熱湯に入れ 色よく茹でし時

この頃の物価高には、この実益による喜びはまた格別なものがある。この自然  
相手の生活が「老後の生きがい」の全てとは思わぬが、「生者必滅」といった哲  
学的なものを体で学びとりたいと願っている。

常会の 重苦しさや 秋の風

長い間お世話になった新盲生活では、会議も時にはレクリエーション的でもあ  
った。（軽率さをお許し願います）それが町内の常会となると私には大きな重荷  
となる。早く地域社会に親しみたいと努力はするが、青菜のようにゆかない。  
人事とはまことに難しい。そんな時思い出すのは、卒業生の皆さんのことである。  
隣組員としてのお付き合い、町内の祭礼事など何かと気を遣われることが多い  
であろうのに、偉いものだと思心するのである。

卒業生の皆さんといえ、業界に教育界に文壇等々にご活躍されておられるこ  
とは何よりも嬉しい。知人にどここの業者の方は、目が不自由なのに私など遠  
く及ばないほど家の内外を整頓しておられる、などと聞かされると「〇〇さん頑  
張って」と陰ながらの声援を送る。何でもないことのようにであるが、自分が毎日  
暮らしてみると本当に感心だと思心するのである。そして、在職時代の学者先生方の  
知識を拝借し、不勉強で過ごした自分を顧みて皆さんにお詫びしたくなる。いや、  
心からお詫び申し上げる次第である。許されるものなら、もう一度はじめからや  
り直しをさせていただきたいと思うことも一再ならずである。

この度は青菜の勢いに圧倒されて、楽しい新盲時代の思い出も陰に隠れてしまったようだ。語りだすと長くなり、ご案内の紙数を超えるので、残念ではあるが割愛しなければならない。

最後に「舟江の六光」100号のご発行を心からお祝い申し上げますとともに、卒業生皆さま方のご健康とご多幸をお祈り申し上げます。摺筆致します。

## 「思い出の中から」

星 淑子

長かった学校生活を終えてからもう十年余の月日が夢のように過ぎてしまいました。小学 2 年生と 3 歳になったばかりの子供を相手に日々を送っている。私の内に十数年を過ごした学園での様々な思い出が、今も懐かしく生き続けています。当時、悲しく辛かったことも数えきれないほどあったはずなのに、今はその全てが楽しく懐かしく思い起こされます。

食堂の裏の草原でクローバーの花を編んで過ごした幼い初夏の日々。じりじり照りつける太陽を全身に受けて水に戯れた海水浴の午後のこと。芸能祭や運動会の練習に明け暮れた秋の日々。そして何よりも文字の読み書きが辛かった冬の日々など、数えきれないほどの事柄の中から特に印象深かったものの一つを書いてみようと思います。

終戦後間もなく、食料をはじめあらゆる物資が極度に不足していた頃だったと思います。学校に赤痢が流行し、臨時休業になったことがありました。何人かの舎生が当時の北浜病院へ入院しましたが、私もその一人でした。その日の午後（2・3 日前から床に就いていたのでしたが）、幼いながら周囲に何となく慌しさを感じていました。確か夕方近くだったと思いますが、担任の先生に「これから病院へ行くんですよ」と言われました。そして半ばふらつく私の体を、そっと床の上に起こし、傍らの寮母さんと一緒に何かと身支度をして下さいました。まだ 9 月も半ばを過ぎたばかりの頃でしたが、毛布や布団に暖かく包まれて自転車に乗せられました。門を出る時「T 先生に連れて行っていただくなんて感謝しなくてはいけませんよ」「あんたは幸せ者だね」など見送りの人たちに声をかけられ、夕陽の道を病院へと運ばれました。途中、先生から受けた優しい心遣いを、今もはっきりと覚えています。そして病院へ入ってから、ベッドまでおぶって行っていただいたことも忘れられません。

他の人にはほんの些細なことと思われるかもしれないこの出来事ですが、私にとっては学校時代から現在を通じてその過去を考えると、決まって思い出されることなのです。そして、これが年と共にいっそう意義深いものとなっていくように思われます。

誰もが忌み嫌う伝染病患者を背に負って病院まで運んでくださった T 先生のご好意を、ただ通り一遍の職業的なものとして簡単に片付けられない現在の心境です。病床に苦しむ幼い子供に何くれとなく気を配り、病院への道を急がれた T 先生のお気持ちが、人の子の親となって初めてわかるような気が致します。

遠い過去に思いをはせて、あの時お世話になった方々、ことに現在もなお教職にあられる T 先生にはいつも感謝の気持ちを忘れることができません。



## 「道」

渡辺 幸栄

人生は意のままに進みがたく躓くことの多き事なり。

これを運命というのであろうか。

国敗れて、年いまだ浅き昭和 24 年。国民の食糧確保という掛け声に汗と泥に塗れていた百姓の小倅の私に、突如として襲いかかってきた病魔と悪戦苦闘が始まる。4 年間の死闘もむなしく、失明という一撃で大地に打ちのめされてしまった。もう立ち上がる気力もなく、ただ脳裏に終わりという文字だけを浮き上がらせて悄然としていると、三国教授に「君の歩いてきた人生は残念ながらここで終わらなければならないが、もう一つの人生がある。その人生を歩むために、多数の人が努力している。君も盲学校へ入って仲間と一緒に頑張りなさい」と励まされて、恐る恐る新潟盲学校の門を叩いた。8 年間も学校生活から離れ、その上、光なき行動の第一歩という二つの重荷が容赦なくのしかかってきた。まず、部屋を出ようとすれば押入れであった。廊下へ出たものの目的地は右か左か見当がつかない。恐る恐る歩いていると、勢いよく歩いてきた人と正面衝突をして、前歯をぐらつかせ、柱や棚にぶつかって頭にコブをいくつも作る。点字に触れば、蚕の種紙のようで、ただざらざらしているだけで字とは思えない。書くのは読むのと逆だということを忘れて書く。時間にしばられた生活でこちこちとなり、体中が痛くて動けなくなる。耳だけで覚えなければならない辛さ、数え上げればきりがない。

しかし、私には戦中教育の忍耐と不屈の闘志がたたきこまれている戦中派の筈だ。この学び舎で会得するのは、自ら生きる最低の武器にしかすぎない。挫折は社会からの抹殺だ。人にできることが自分にできない筈がないと我が身に言い聞かせて、のしかかる重荷をこらえた。幸いにして良い教師先輩友人に支えられて、押しつぶされることなく、ようやく新しい人生をスタートすることができた。人生という道は確かに一本ではなかった。たとえ二本目の道にあたる陽ざしは弱くとも、その道を歩いたために社会の 1 細胞として存在し、また一男二女の親として位置づけられることができた。

## 「遠い日の絵空事」

笠原 工嗣

母に連れられて母校の門をくぐったのは、昭和23年15の春かと記憶も定かではない。校長室に通され現校長のT先生に「君は前の学校ではどんな学科が好きでしたか」と問われたことを思い出す。そのときの答えも不思議とはっきり覚えている。「僕は図画が大好きです。小学校は1年からずっと甲から優と変わらない成績でした」と誇らしげに語り、さらに「近目で遠くがぼんやりとしか見えないので風景などは思い切って大胆に描けますが、メガネをかけると木の葉の一枚一枚や葉脈まで見えるので、とても描けなくなってしまいます」となんとも珍妙な答えをしたものだ。

母校がどんな意味を持つ学校かもわからぬままの入学であった。我々の世代は軍国主義と戦後民主主義教育の渦中に身をゆだねて育った。かつては文弱を廃し、質実剛健が叫ばれ、一夜明ければ、ペンは剣よりも強しとか、言論こそ最大の武器などと唱え、猫の目の変わる思いに少なからず戸惑いの体験をさせられたものだ。校長室でのT先生の話しかけに自分の心の片隅に眠っていたものが呼び覚まされた心地であった。こんな話ができるのは、本当に戦争が終わり自由なことが学べるようになったのだ。まさかT先生は、好きな絵も学べるなどと、自分が一人喜んでいるとは思ひもしなかったであろうに……

それから2・3年は珍しさも手伝って、点字やら解剖やらで夢の間に時は過ぎた。そのうちに自分と自分を取り巻く級友隣人などに目を向け始め、悩み多い日々と試行錯誤の歳月を迎えるのである。その一つに、当時視聴覚教育が盛んに叫ばれ始め、夏休みなどで帰省すると、旧友との間で互いの学校の様子を語り合う時、自分が特殊な世界に置かれている違和感を絶えず覚えた。今でこそ映像文化などという言葉も耳新しくないが、自分にとっては羨ましい一つの驚きであった。

母校では当時、弱視者に対する配慮は今日ほどは行われてはいなかった。絵画であれ映像文化であれ、それは視覚を通して我々に訴える。このような特殊な環境では自分には縁もゆかりもないものだと痛ましいほど身に応え、大真面目に悩んだひとコマを思い出す。弱視教育イコール盲教育で、さらに職業教育が一本のレールに組まれていることに、ようやく気付くといった幼稚さであった。

視力障害者の方々はよくお喋りをする。視覚のない世界は接触と耳を介してのコミュニケーションしかない。やはり自分にとっては異様な世界であり、常に傍観者でいたり傍観者にさせられたものだ。辛辣な言葉も飛び出し、人の胸を

突く。もっとも額を射るような視線などありようもないのだが……。喧喧嘈嘈であった。でも、それが今日、師友に会うと自然に声だけでなく、握手を求めたり肩を叩いたりする。視覚のない世界が与えてくれた仕種が身についた事ありがたい。スキンシップなどと、どこかの偉い人が言い出す前に、また、どこかの国の代議士諸侯が「やあやあ」とやる肩叩き戦術などと言う前に覚えた。絵心はとうに薄れたが「動的な世界」などと好んで口にしたり、同校のU氏との会話が一番実り多く感ずる昨今である。

(1971 如月)

## 「金鉢山の回想」

中川 童二

太平洋戦争終結の年に私は失明して関屋にあった盲学校へ入学しました。それから20数年の歳月が流れました。その後、山二ツの新しい盲学校へ何度か行きましたが、回想の中に現れる盲学校は金鉢山の前にあった旧校舎で、今でもその建物があるような錯覚におそわれます。

校舎の前を少し行くと、豚小屋のある農家がありました。それから、また少し行くと、関屋かぼちゃで有名なかぼちゃ畑がありました。「一列になってかぼちゃを踏まないように・・・」私たちが引率していった級長が言いました。畑の中のあぜ道を過ぎて土手を上ると、競馬場の柵がありました。私たちは競馬場へ運動をしに行っただけです。帰りに誰かが土手から飛び降りて、畑の中へ義眼を落としてしまいました。「捜していたら目玉のやつ俺を見るようなかたちで落っこっていたよ」 Y君だったと思いますが、こんな愉快的なこともありました。

入学して間もなくでしたが、担任の福原先生が私の家へやってきました。「民主主義になったのですから誰がどんな格好をしていてもいいわけなんですけど・・・」先生は言い出しにくそうに言いました。私の髭が職員室で問題になったというのです。「髭の生えている生徒には教えにくいというのです」私はコールマン髭という細いハの字型の髭を生やしていました。私は頭が禿げ上がっているため顔がずんべらぼうに見えます。顔に締りをつけるために生やしている自慢の髭でした。先生にそう言われるとそんなものかと思い、そのうちに落としますと答えました。なんだか惜しいような気がしていましたが、床屋のおかみさんがうっかりして片方を剃り落としたため問題は解決しました。

そんな笑い話もありましたが、生活は極端に苦しく、精神的にも物質的にも参っていたのです。その暗い心にひと筋の光を与えてくれたのが盲学校です。最近、明治維新当時の新潟を背景とした短編小説を書きました。資料をあさっていると、新潟を守っていた東北連合軍と官軍とが、金鉢山のあたりで激突し、指揮官である米沢藩の色部長門が戦死したことを知りました。校舎のあった辺りだろうか、豚小屋のあった辺りだろうか、かぼちゃ畑か。私の回想は懐かしく広がりました。

長い盲学校の歴史の中で、太平洋戦争当時のことが特筆されるでしょう。私の生涯の中でも忘れることのできないような懐かしい思い出がたくさんあります。

## 「学生時代の思い出」

本間 國雄

光陰矢のごとしとか申しますが、本当に月日の経つのは早いものです。私が母校を巣立ち、会津の田舎町に開業して早 20 年。今では高校 1 年と小学 6 年の二人の男の子の親となり、元気で働いております。今日こうして働いておられますのも、母校の先生方をはじめ友達の友情、そして社会の皆さまのおかげと心から感謝しております。

私の学生時代は、昭和 18 年から 26 年にかけての最も食糧事情の悪い時で苦勞しましたが、しかし、いつ思い出しても学生時代はいいですねえ。ではその中から一つ二つ拾ってみましょう。

弥彦登山・・・入学してふた月。ようやく学校生活にも慣れて、春の遠足がやってきました。6 月 8 日、昨夜来の雨も上がり、絶好の好天気となりました。今年は足腰を鍛えるため、全校生徒を弥彦登山に連れて行って下さると聞き、どんなにこの日を待っていたことでしょうか。しかし、当時は今と違い道が悪いので、5 年生以上が山に登り、4 年生以下は弥彦神社の境内で休んで待っていることになりました。私は山に登りたくて、特別先生にお願いして、主任の伊藤あや先生に連れられて上級生の後について登ることになりました。雨上がりということもあって、道は滑るやら木の根っこが飛び出していたり、岩の段々があったりして、這って登ったり手を引っ張ってもらった所も何ヶ所もありました。海拔 638 メートルの山を 3 時間近くかかり苦勞して登っただけに、その嬉しさはひとしおでした。頂上は、時おり霧雨が降ってきたり、白い雲のようなものが目の前を通りうすら寒かったが、お腹を空かせていたので、昼食のおにぎりを山の頂上でいただくのはこれまた格別の味でした。

海水浴・・・当時、母校は関屋の金鉢山の傍にあり、海岸まで徒歩で 15 分位で行きました。毎年夏になると、海へ連れて行っていただけなのが嬉しくて、首を長くして待っていたものです。暑い夏の太陽に照らされ、二つの砂山を越えると、ザブンザブンという波の音が耳を聳るばかりです。波打ち際で準備体操をして泳ぐのですが、あの広い海原に体を浮かべたり潜ったり、犬かきを教わって泳げるようになった時の嬉しかったことや、砂原で甲羅干しをしたり相撲をとったりして真っ黒に日に焼け、校長先生に誉められたこともあります。海水浴中は、夕食のおじやもご飯になり、間食も付くので楽しかったっけなあ。

## 「溝口先生の思い出」

堀 澄

溝口宗六先生は中頸城郡新道村のご出身で、昭和 18 年 5 月から同 30 年 4 月まで丸 12 年間、母校において盲教育に専念され、退職後は心配事相談員として、あるいは関屋地区の老人クラブや肢体不自由者の会の幹部として、お体のご不自由をも顧みず、世のため人のために尽くされた大功労者であったが、昭和 46 年 6 月 18 日、突然、老衰のため亡くなられた。御歳 81 歳であった。ここに謹んで先生のご冥福を祈りながら御生前の先生の面影を偲んでみたい。

昭和 19 年 9 月、私が本校の中等部 2 年に編入した時、溝口先生の受け持ちであった。先生はこの頃 54・5 歳であったろうか。前に何処かの校長をしておられたとかで、大変貴祿のある、しかも穏やかな感じのするお方であった。いつも杖をついてこつんこつんと歩いておられ、通称「つっこ先生」と呼ばれていた。これは先生が「つっこくる」という方言をよくお使いになるからだとのことであった。

私どものクラスは総員 14 名中 13 名までがまったくの全盲で、残されたただ一人の半盲男子は足が悪く、また、受け持ちの溝口先生も足がお悪かったので、遠足や作業などクラスごとにまとまって何かやるような時には、先生は人知れずご苦勞をなさったようであった。中でも各クラスごとに防空壕を掘った時など、他のクラスではとっくにできているのに、うちのクラスだけはいくら時間をかけてもなかなかできず、大変困ってしまわれたようであった。

先生は礼儀に関しては大変厳しく、私どもに「授業が始まる時には先生に向かって必ず“教えていただきます”と言って頭を下げなさい」と教えられた。しかし、私どもは何だか照れくさくて、時間になってもその言葉が言えず、そのため、クラス全員が長い時間立たされたことがあった。

また、クラス全員数学の宿題をしないでゆき、その罰として夕食を一定の時間までお預けされ、その間、教室で先生が付きっきりで数学の勉強をさせられ、やっと赦されて、先生共々、のびたおじやをいただくため皆食堂へ急いだ。そして、一口食べ始めたとたん停電した。私ども 13 名は、もちろん何の差し障りもないので美味しくいただいたが、溝口先生がさぞご不自由だろうと思うと、さんざんしごかれた後だったので多少小気味よくも思われて、口元に浮かぶ微笑を禁ずることができなかった。

また、お掃除の時、先生に「雑巾が曲がっている」と注意され顔を赤らめたこともあった。また、私は帰省する時、先生から長岡の家まで送っていただいたこともあった。駅へ着いたところ「さあ、あんたの家の方向へ向かって歩きな

さい」と言われたが、いつも車でばかり帰っていたので恥ずかしながら右へ行けばよいか左へ行けばよいか分からず、この時ほど困ったことはなかった。

その後、歳は過ぎ、月日は流れて先生は逝かれた。そして、私は先生の赴任当時の歳になってしまった。

## 「思い出」

中島 禧岡

私が金鉢山にあった母校新潟盲学校に入学したのは、忘れもしない日支事変が始まった翌年昭和 13 年 4 月でした。俄かに失明した私には、盲学校はあんま、針灸などの職を身につけさせてくれる所だということ以外は、何も知りませんでした。入学してみると、そのことには違いはありませんでしたが、勉強に、運動に、遊びに、生徒の皆さんがやっていることは、私の想像とは違い、驚かされることばかりでした。先生や生徒の温かい心に励まされ、失明の苦しみを乗り越えて、更生への道を一步一步歩むことのできたことは、今なお私の胸に深く刻み込まれ、時に触れ折に触れ当時のことを偲ぶ時は、ただ感謝の気持ちでいっぱいになります。

在学当時、裏浜での海水浴、裏の草原での月見、また運動会、山登り遠足など、懐かしい思い出は数え切れないほど沢山あります。時あたかも戦時下、支那事変は大東亜戦争に拡大し、食料はじめ全ての物資が不足してまいりました。あらゆる苦難に耐え、兵隊さんの労苦を偲ぶため夜行軍や雪の上を素足で駆けて頑張ったものでした。中でも今、母校の校長さんでいらっしゃる塚本先生の指揮の下、敬礼、折敷、伏せ、捧げ銃などの軍隊教練を習ったことや、弥彦神社で戦勝祈願をした後弥彦山に登り、さらに国上山に登って五合庵で良寛さまを偲び、その近くで近所の方から酒吞童子の話をもみんなで聞きました。

やがて山を下って疲れた足でようやく弥彦へ着いた時は、もはや予定の汽車時間は過ぎていました。そこで、近くの旅館で夕食をいただくことになりました。酒吞童子の話聞いて時間に遅れたことによせて、石井重蔵氏が夕食を食べながら「酒吞童子に感謝溢るる」と冗談をもらした時の校長樋口嘉雄先生が思わず声を上げて高笑い。皆もドッと笑ったことなどは、ことに懐かしい思い出として浮かんでまいります。

食糧不足と戦って炊事をきりまわす樋口政枝先生、髭の先生で親しまれている東條先生はじめ、諸先生や生徒のみなさんにまつわる懐かしい思い出は、金鉢山と共に永久に心の灯火として消えることはないでしょう。

今、校舎は山ニツに移り、時代もずいぶん変わりました。しかし、母校に残された 60 年の伝統と先輩の培われた良き風習は、校歌と共に永久に滅びることなく、さらに新しい時代の波を乗り切り、培われ磨かれて、見えぬ目に心の光を与える「うれし うれし 教えの光 愛の園」であることを心から祈ってやみません。



「60周年を記念して歌3首」

中村 松治

みそとせを 今に戻して 同窓の  
友と語らう 金鉢の山

亡き数に 入りにし友を 偲びつつ  
肩抱きあい 生きる幸せ

遙かなる 友に届けと 懐かしの  
歌う校歌に 睨ぬらしつ

## 「砂山日記」

捧 梅次郎

昭和2年4月8日（金）

盲学校入学。父とともに新潟行き。行李ひとつ、寝具ひと包み。簡単な指紋と体格検査ありて合格。机求む。価格2円也。寄宿舍は西堀の上野館。舎監湯村先生。

4月14日（木）

白山さまの祭り。同室の長谷川、立川、目黒とともに1時間ばかりお宮で遊ぶ。バイオリンの流しを聞く。立川君は草花を、目黒君は自動車を買ってくる。

昭和3年2月25日（月）

午前、生理学の総論終わる。国語「本能寺の夜嵐」。体操は休んで病院へ。午後の英語は天長節の唱歌の稽古で休み。あんまは東条先生、病欠。琵琶「羽衣」。國松君に頭を刈ってやる。

10月16日（火）

グラウンドで秋季大運動会。新聞社よりメダル6個寄贈あり。渡辺、芥川、松本、浅妻など受賞。

昭和4年12月21日（土）

中4の教室で相互修養会開催。司会 池田。議題「盲人はなぜ卑下されるか」。出席者、山谷、田中、浮須、小野塚、山口、捧。女子では大竹、平野、金子、本井、加藤。他に参観者として中4の渡辺と藤石君。議論百出。楽天論あり、悲憤慷慨組ありて有意義なりき。薄暮散会。

昭和5年2月27日（水）

金鉢山の新校舍及び新寄宿舍へ移る。新潟中学と新潟商業の古材で建てたる物。総工費4万1千円とか。東盲を除いては日本一の盲学校の由。寄宿舍の部屋は第8部。同室者、須田、星野、神田、山口、増井、吉崎、中川、島田、米田、沢栗、室長は捧。

7月4日（金）

暑い日の午後、マッサージの実地である。開業しても食っていけるかどうかが話題になる。誰かが中3平野タマの短歌を披露した。面白い歌なので書き留めておく。

按摩の笛 聞くたび毎に 思うかな  
我が行く末は 如何になるかと

10月23日(木)

弁論会及び討論会あり。弁士、神田智賢、栗原広松、安達正文、高井富一、田辺忠雄、星野金一。討論会は「按摩專業の可否」。專業可とする者、安達、神田、高井。否とする者、佐藤忠左衛門と自分。堂々と論陣を張って彼らをへこます。

昭和6年3月23日(月)

午前10時より第20回卒業式。梅田新潟中学校長来たり。訓辞あり。本年度の卒業生、中等部 高橋タツ、阿部(政)、捧。小等部 阿部、佐野、渡邊(吭)。別科 佐藤(忠)、浅妻。終わって記念撮影。校舎の前へ記念の桜6本植える。午後1時より祝賀会。

3月25日(木)

帰省の荷造りをして高井、小川君と共に駅へ出して来る。寄宿舍はがらんとしてもう誰もいない。玄関で3人の炊事婦と會田(舎監)先生が送って下された。涙が出そうだ。校舎よ、寄宿舍よ、永久にさようなら。皆さん、さようなら。

## 「随想」

渡邊 信一

先に母校の創立 60 周年を迎え、今またさらに同窓会の創立 60 周年を迎えることのできますことは、私ども卒業生にとりまして、この上もない大きな喜びであると思います。60 年といえば本当に長い年月であります。この間、同窓会としてはその運営について幾多の苦難があり、険しい起伏にも遭遇したことと思います。よって、これら多くの問題を処理し、諸般の事業を推進され、今日の隆昌に至らしめられた方々のご苦勞は並大抵ではなかったことと思ひ、衷心より深い敬意と感謝の意を表する次第であります。

私は半世紀近くも前の卒業で、それはずっと昔の事ですが、何十年経っても母校新潟盲学校を忘れることができません。いな、むしろ年数が経てば経つほど、懐かしさが増してくるようになります。

枝垂れ柳の植わった西堀の校舎は忘れることのできない所です。今から考えたら問題にならないほどの校舎であったかもしれません。しかし、私ども当時の生徒にとっては本当に楽しい我が家、いな、学び舎であったと思います。なぜなら、ここには父にも母にも勝るほどの慈愛に満ちた大勢の先生方と友情ある大勢の学友がいて、楽しく勉強ができたからだと思います。学校や寄宿舍での数々の行事。それらも、年をとった今でも懐かしい思い出です。

光陰矢のごとし、早瀬のごとく年が流れ、いつしか頭に霜を置く老境に入ってしまったが、若木もいつかは老木になるのですから止むを得ないと思ひます。

最後に母校と同窓会が永久に栄えますようお祈りして拙い筆を置きます。

(関東の一角、茨城の地にて)

## 「専任初代の校長を語る」

東條 末次郎

### 「その2」

他方、校長は職員の要請にこたえて、校舎の建築移転に全身全霊を傾けられた。私の親友齋藤良太君が田島学務部長のマッサージに行った時、部長は「樋口君が校長になってから日はまだ浅いが、全盲生に対する心遣いや、その研究熱心なのに驚かされた・・・現在の学校は場所としては申し分はないが、敷地も校舎も狭すぎて、どう工夫してみても動きがとれない。そこで多少の不便があっても、市の中心から離れ、敷地も校舎も広くし、のびのびとした所で教育してやりたい。敷地が広ければ、所々にベンチを置き、日光浴をさせることができる。また色々な植物を植えて、これを探って観察させるようにし、理科教育の一助ともし、併せて美的情操の陶冶に役立たせたいと思う。

校舎は柱や敷居の角を丸くし、ぶつかることがあっても、つまずくことがあっても、大怪我のないようにしてやりたい。今、寄宿は三所にも四所にも分かれている。これを教育上の見地から、絶対に一所にまとめる必要がある。以上は視力障害者を教育する我々が考えたもので、教育を受ける生徒からは多くの希望が出ることであろう。それらはまとまり次第お話するが、建築移転が実現するようお取り計らいを願いたい。私は県の事業もあろうから贅沢なことは言わない。だが、最小限度私たちの希望を入れて貰いたい・・・と話して帰った」齋藤君はマッサージ中に聞いた事を私に詳しく聞かせてくれた。そして学校の建築移転は遠い将来でなさそうだ。母校発展のため、喜びに堪えないと言ってぐっと茶を飲み干した。

それから間もなく、移転先は関屋と決まり、校外散歩の名のもとに敷地見学に出かけたのだった。やがて校舎の新築成って移転したのは昭和5年2月26日であった。そしてこの日を寄宿舎の記念日と定めたのである。それは、今まで幾所にも分かれていた100人以上の生徒が一つところに集まって、同じ屋根の下に住むようになったという意味からである。

校長はまた、11の項目を選び、これを月々に割り当て講演会を開くことにされた。講師は教職員が当たることになり、年度初めに発表されることになった。そのいの一に「国旗について」と題し、校長自ら範を示されたのだった。

次に凝念（思いを凝らす）というものが実施された。その実施要領はおよそ次のとおりであった。

- 1 毎朝、職員生徒は講堂に正座し、校長に合わせて「心の力」を朗読する。
- 2 朗読が済むと鐘を鳴らし、その響きが消えるまで思いを凝らすのである。

この凝念に対し足が痛くて立つに容易でないとか、こんな事を毎日繰り返して何になるのだとか色々な声もあったが、日が経つにしたがい、凝念は良い事だ、気持ちが爽やかになるとか、心が落ち着いて教室でも先生のお話がよくわかるとか、評判はだんだん良くなってきた。

この凝念に使われた鐘は、今も前田、久保田両先生の遺骨の前に供えられていると思うが・・・。

前にも述べた通り樋口先生が母校へ赴任されたのは昭和2年12月27日であり、大阪府立盲学校長に転出されたのは昭和10年6月29日である。また先生の年から見れば、44から52歳という男盛りの7年6ヶ月の間、全力を振り絞って、今日ある母校の基礎を築かれた功績に対し感謝せずにはおられない。

先生は正直で真面目な方である。話せば豪放磊落、仕事に対しては緻密な計画の下に実行されたことは、人のよく知るところである。大阪府立時代には、帝国盲教育界の副会長、その他色々の役職を兼ね、それぞれ見るべき足跡を残されたことは実に驚くほかはない。さればこそ、昭和41年4月29日天皇誕生の良き日にあたり、奏功旭日章下賜勲5等を授けられたのである。時に83歳であった。

先生は今年88歳になられるが、不幸、昨年2月以来病褥に伏し、もっか加療しておられる。再び元気を回復し、あの「あっははー」という豪快な笑いを聞かせて下さることをお祈りして筆を置く。

## 創立 60 周年記念寄付者氏名

この度、記念事業を行うにあたり寄付を募集致しましたところ、9月16日現在で44万4300円という多額のお金が集まりました。係り一同感謝致しております。次にその氏名を掲載致します。(敬称略)

1万円・・・丸山芳英

5千円・・・中川光一、千代沢スミ、山谷竹次郎

以下、寄付者名を省略 P73・L6 (点字版) まで

## (記念総会並びに式典)

新盲同窓会、創立60周年記念総会式典祝宴等は昭和46年10月10日、母校において盛大に行われた。幸い天候に恵まれ、出席者は来賓客員会員等合わせて160余名の多数に及んだ。

8時半を過ぎると受付時間を今や遅しと待ち構えていた人々が続々と詰めかけ、できたばかりの会員名簿を銘々受け取って、会場である体育館に集まった。午前10時北理事の司会で総会が始められた。議長団は捧梅次郎、星野金一の2氏。最初、会長挨拶があって、報告並びに議事に移った。最初の議題は役員改選の取り扱いであった。今年は役員改選期にあたるが決め方をどうするかという北理事の提案であったが、選考委員を挙げて決めるという満場の意見により伊藤武男、齋藤春二、本間栄一3氏が委員に選ばれ別室で協議することになった。これと平行して議事は進行した。青木理事の一般会務報告、45年度決算報告、次いで富山理事の46年度予算並びに事業計画に関する提案があり、異議なく承認された。続いて役員改選に移り、先に挙げられた委員の代表伊藤氏から会長、副会長の名前が発表された。いずれも留任。次いで会長、副会長が話し合いの結果、理事及び評議員の名前が発表された。

新役員は次の通り「敬称略」

会 長 東條末次郎

副会長 加藤吉太郎、伊藤武男

理 事

以下理事・評議員の名前を省略 P76・L5 (点字版) まで

これで用意された議題は終わったが、会員中から「学校の勝手にわからず不自由なので大体の構造を説明して欲しい」という要望があり、伊藤氏がその説明を行った。またその時、「同窓会の案内状は不親切だ」という意見も出た。終わりに、出席者の紹介があり、総会は 11 時前に終わった。

10 分休憩の後、北理事の進行で記念式典が行われた。伊藤副会長の開会の挨拶、東条会長の式辞、塚本顧問の祝辞、祝電披露（福原良二氏、渡邊信一氏より）などがあり、表彰に移った。

以下表彰者の名前を省略 P77・L17（点字版）まで

樋口謹一先生はじめ、長い間本会のために、各方面からお力添え下さったこれらの方々に、一同心からなる感謝の意を表したのであった。

続いて樋口謹一、高橋寅治、大関隆昌、樋口政枝の諸先生からそれぞれお言葉を戴いたが、特に樋口謹一先生のご病気のため、やや不明瞭になられたお言葉で一生懸命話しておられるお声を伺い、お元気だった昔を知る人々の中には、目を押さえる人もあった。

次いで、客員代表として母校教頭扇先生が一言挨拶され、加藤氏の閉会の言葉があって式典は滞りなく終了した。

その後、昼食の赤飯が配られ祝宴会場である食堂に入場した。12 時 40 分から山崎理事の司会で開会。東條会長の挨拶、伊藤副会長の音頭で乾杯。あとは折り詰めとお酒に舌鼓を打ちながら久方ぶりで会う級友たちと話がはずみ、どの顔にも微笑があふれ、時間の経つのも忘れて、しばし和やかな雰囲気になったのである。やがて 2 時を少し過ぎた頃、会長の発声で母校の繁栄と本会の発展を祈って万歳を三唱し、閉会となった。一同は尽きぬ名残を惜しみながらそれぞれ帰途についた。

1971/10/16 堀 澄

以下 本会の動き・昭和 45 年度決算・編集後記など省略 最終ページまで



# 舟江の六光

第106号

新潟盲学校同窓会創立70周年記念

昭和56年12月20日発行

## 目次

「巻頭言」	同窓会会長	捧 梅次郎	.....	P1
「記念誌に寄せて」	校長	塚野 裕	.....	P2
「同窓生の集まり」	旧職員	福原 良二	.....	P3
「回想」	旧職員	中沢 榮次	.....	P4
「吹上菊」		捧 梅次郎	.....	P5
「思いでの中に」		金子 ヨシノ	.....	P6
「思いでの記」		伊藤 武男	.....	P8
「母校の思い出」		藤田 秀雄	.....	P9
「入学当時の思い出」		瀧沢 ミネ	.....	P11
「金鉢山思い出草」		中川 童二	.....	P13
「金鉢の母校の思い出」		木村 馨	.....	P14
「在学中の思い出」		小山 啓吉	.....	P16
「盲学校の思い出」		服部 ミチ子	.....	P18
「今感じていること」		池田 邦紀	.....	P20
「学生時代の思い出」		味方 富子	.....	P21
「焼き物ってむずかしいな」		堀 陽子	.....	P23
「記念講演」		加藤 克知	.....	P24
(事務局便り)			.....	P26
(編集後記)			.....	P28

同窓会会長 捧 梅次郎

去る10月10日、母校同窓会の創立70周年記念式典で、私は次のような趣旨の挨拶をいたしました。

「…顧みますれば、70周年は長い年月でありました。我が同窓会は、創立以来母校の歴史とともに歩み、母校の大きな翼のもとにはぐくまれ、先輩諸氏の努力によって今日この繁栄をもたらすに至ったのであります。今や会員も1,100人余りを擁し、財政の基盤も確立して、会の運営は安泰でございます。

この繁栄を、今後益々発展せしむるには、会員同士の交流と、とにかく総会には大勢集まって貰うことであります。母校はふるさとであります。何年か前、あるいは何十年か前、蛍の光を歌って別れた、あの感激を思い起こして、1年に1回ないし2年に1回母なる母校に集まって、まず自分の存在を確かめ、人の存在を確かめ、お互いの健康を喜びあいながら、ヤーヤーと肩を叩き、手を握り合って、再会を喜ぶ。あるいは懐かしい先生方にお会いして、在学当時の思い出話をする。そんなところに同窓会としての意義があるのではないのでしょうか。そういう意味で皆さん、総会にはぜひ大勢集まって貰いたいと思います…」記念誌発行に当たりその一部を再録して責めを果たします。

終わりに母校の発展と皆様の健康をお祈り申し上げます。

## 記念誌に寄せて

校長 塚野 裕

本校同窓会創立 70 周年を迎えられ、心からお喜び申し上げます。

去る 10 月 10 日の記念式典には、百名余りにもものぼる出席者のもと、表彰・講演をはじめ和やかな祝宴が盛大に開催されました。また記念事業の一環として、すでに発刊をみた同窓会名簿に続いて、ここに記念誌が発行されますことは、きわめて意義深いことであり、誠にご同慶に存する次第です。

本校創立以来すでに 1,000 名を超す卒業生の皆さんが、在校時代に学ばれた知識技能を基礎に、さらに研鑽を重ねられ、県内外の各方面に活躍しておられることは、私ども職員生徒にとり誠に力強く感じ、心から敬意と感謝を申し上げるものであります。また同窓会は懐かしさ楽しさの他に、年代の相違や地域の違いから全く未知の間柄にあった人たちが同窓生とわかり、母校の思い出から親しくなり、百年の知己となることは決して珍しいことでなく、ご経験もおありかと思えます。この会を通し社会のご発展を期して下さるようお願いいたします。

さて本校の歴史を振り返って、元校長の塚本先生は、私立時代の 15 年間は創設苦難の時代。県立移管後の関屋金鉢山時代の 40 年間は、飛躍充実発展の時代。昭和 37 年からの山ニツ時代は、新教育制度充実の時代であると述べておられます。本年は国際障害者年にあたり、特殊教育についても社会一般の関心と理解は深まりつつあり、喜びに堪えないところですが、反面私ども直接教育を担当している者にとり、教育内容の充実に一層の成果が期待されています。

「完全参加と平等」という目的達成のため、さらに力強いたくましい生徒の育成に努めたいと考えております。ここに同窓会の皆様から、母校に対しあるいは後輩に対し、今までにお寄せ頂いた温かい思いに感謝するとともに、今後なお格段のご協力をお願いいたします。

終わりにのぞみ、皆様の一層のご健康とご活躍、同窓会のますますの発展をお祈り申し上げます。

## 同窓生の集まり

旧職員 福原 良二

ずっと以前には、同窓会の総会は春と秋の 2 回行われ、相当の数の出席を見ておりましたが、一番同窓生がよけい集まったのは、10 年ごとに行われた学校の創立記念式の時と、それぞれの 4 年後に行われた、同窓会の記念集会の時であったと思います。

学校創立 40 年記念式は、戦後の混乱がまだ残っていた昭和 22 年でしたが、平和を迎えた空気は明るく、昼飯に赤飯の笹折を出すということで、沢山集まり、そのころ盛んに行われた芸能コンクールに、同窓生も職員も出演して、その技を競いました。私はかつて担任であったクラスの一員と「男純情の」を歌い、それから一人で「出鱈目の唄」を歌って第 3 位に入賞しました。

昭和 32 年の創立 50 周年記念式のときには、沢山の同窓生と旧職員と現職員と生徒の父兄と本当にたくさん集まって、誠に楽しくにぎやかでありましたが、あまりの混雑で廊下で衝突しないよう、左側を静かに通るよう校内放送をしたりしました。

久しぶりで出会った人たちが、お互いに手を取り合って、本当に楽しい一日であり、職員と在校生で組織されていた吹奏楽団の演奏は、大変好評でありました。（空いている畳の部屋へ泊まった人も多かった）

さて、昭和 42 年創立 60 周年の記念式は大々的に行われ、新築落成を紹介する意味もあって、各地からの来賓などもたくさん招待されましたが、むしろそちらの方が中心となり、せっかく集まった同窓生は、新しい学校の地理がわからず、会いたい人にも会えず、ただ右往左往しているうちに終わってしまったかの感もありました。

盲学校の同窓生は目が見えないのだから、そのことを配慮しない計画は好ましくないなどと思いながら、自分に命じられた来賓案内係はほったらかして、迷っている同窓生の案内をしているうちに終わってしまいました。私の一番印象深く、又みんなが本当に盲学校の記念式らしく喜んだのは、昭和 32 年の集まりであったと思います。だってあの進行の原案は自分が書いたのですから…。

## 回 想

旧職員 中沢 榮次

盲学校は教員生活の中で一番長かった。私の教員生活の全てであるように思える。それだけに沢山の思い出があった。その生活の中でなれない体育を20年間受け持った。常に汗と泥と丈夫な身体、精神力の生活であった。閑屋時代の運動会、相撲大会は楽しかった。

又、海水浴で沖へ泳いだときの気分は良かった。全国陸上競技大会には、優秀な成績だった。中でも相撲は、小林先生の指導で本校の右に出る学校はなかった。北信越の野球大会、柔道大会、バレー大会、今では20数回を数え、苦しい練習の中で定着した。又、雪の降ったときは、除雪作業、庭造りなどは苦しいひとこまであった。10数回の五頭登山、安達太良登山、佐渡どんでんキャンプ等の思い出は尽きない。このような思い出に残ることは、先生方始め生徒諸君の協力のおかげと感謝している。苦しかったが楽しい生活を送らせていただいたことは有り難いと思っている。中でも非常に心配し、自分の精力を出したのは、どんでんキャンプであった。「登山とは歩いて登ることで、車で登ることではない」「両津から歩かねば連れて行かない」という募集の仕方であった。集まった者はあまり苦しいことを経験したことの少ない、体の弱い人たちの集まりであった。船から下りると歩き出し、早くも暑くて町の中で水をかぶる先生もでてきた。山の麓に着いたときは午後3時、みんなだいたい疲れていた。途中ダウンする者があるやもしれない心配もあった。どんなに夜になっても山まであげようの一心でゆっくり足を運んだ。アオネバ峠に着いたときは6時に近かった。思い切り、設営のため先発隊を出した。先発隊は山の中で三三五五に分かれて、道に迷ってしまった。夜盲も多かった。日は暮れる、声を出しながらあちこちに分かれた。友の位置を確かめ、激励し、方向を指示しながら歩いた。山に着いたときは先発隊も本隊も同時であった。点呼をとった。全員無事。8時過ぎ、一人一人の顔もよく見ることが出来ない程あたりは暗かった。夕食は暗いところで飯盒炊事、真っ黒に焦げ、炭になっているところもあった。カレーをかけて食べたが一人として文句を言う者はなかった。

## 吹上菊

捧 梅次郎 昭和6年卒

毎年 10 月になると庭の一隅に吹上菊が咲き始める。この菊は今からちょうど 10 年前、山二ツの母校から移し植えたものであり、しかもこれは、今は亡き塚本校長先生から頂いてきたものである。その日は同窓会創立 60 周年記念祝賀会が催されていた。会が終わってから私と家内は、学校の庭園を散策していた。花壇は整然と区画され、色とりどりの秋の草花が妍を競って咲いていた。その一角にこの吹上菊も咲いていたのである。純白でたおやかなその姿は、楚々としてつつましい少女の清純さを思わせる花である。私と家内がこの花に見とれていると、後ろから校長先生の声があって、お気に召したら一株お分けしましょうかと云われる。時あたかもよし、60 周年のこのよき日に母校の花を我が庭に移し植える、なんと幸運なことだろう。私は、先生の厚意を感謝しつつ、これを頂戴してきたのである。

先生が母校をお辞めになられたある一日、新潟駅前のブラザービルで、有志による送別会が催された。私は先生と杯を交わして、お互いの健康を祝福した。かなり酩酊されたらしく、上機嫌で奥様とご一緒に会場を去られたのであるが、それが先生との最後のお別れとなったのである。

10 年の歳月は再び巡ってきた。季節を違わず今年も吹上菊が咲いている。さりながら今や先生はなし。

年々歳々花相似たり  
歳々年々人同じからず  
生々流転はかなきは人の命

毎年、吹上菊が咲く頃になると私は母校の庭と、塚本先生を思い出して感慨にふけるのである。

## 思い出の中に

金子 ヨシノ 昭和7年卒

私が新潟市の県立盲学校に入学したのは大正13年で、建物は寺裏にあった。校舎は新校舎、旧校舎の二つになっていたといったら、みなさんはどんなにすばらしい大きな学校だったろうと思われるでしょうが、旧校舎には食堂と、今でいう用務員住み込みの家族連れの部屋と、教室が二つか三つで、湯殿と男生徒の寄宿舍が付属していた。

新校舎は、二階建てで、二階に教室三つと大講堂があったように記憶している。昔は6年制で、職業教育が主であつたらしく、私が入ったときは、まだ旧制度の人がいた。

私が入学したときに、始めに初等部、中等部の制度ができたのであるが、長岡市の盲学校が廃され、高田と新潟の二校になっても、旧制度の人たちが卒業するまでという条件付きで、新潟の学校にも啞生の教室が一つあり、私の入った寄宿舍の部屋にも啞生が二人いた。彼らは私と仲良しになるために、手真似を熱心に教えてくれたものである。

校長は新潟師範と兼任で、私たちは滅多に校長先生の声を聞くことはなかった。みなさんも聞き知っておられると思うが、全盲で教頭の高橋幸三郎先生と、その家族が女生徒の寄宿に住んでおられた。

用務員の風間さん夫妻はとても心の優しい人たちであつたが、食堂ではよくそのご主人に説教された。といつても女生徒ではなく、男生徒のおかげで時々ごちそうのお預けをくったものである。

「あなたつ！ ゆんべも まろろろぼうしたね。わたすが せっかく かぎを かけてきても まろろぼうされては ぶよーずんで こまる。こんご そういう ことの ないように きいつけて もらえてー…」

男生徒が夜遅く勉強に疲れると、窓から飛び出して行って、夜鳴きそばを食べに行くというのであつた。だが男生徒の窓泥棒はその後も続いていたらしい。

女生徒も夜中に沢庵を盗みにいって、よく食べていたと、先輩がこそこそ話していたのを、聞いたことはあつたが、私たちの時代にはそんな沢庵泥棒はしなかつたようである。

この風間さんに二人の男の子があつた。先生方が名前を付けてくださったと聞いている。ただしに、ただおという、いい名であつたが、風間さんの奥さんが子供たちを呼んでいられるのを聞くと面白かつた。

「たらしー、たらおー」というのである。確か昭和2年2月1日の夜の時頃だつたと思う。火の気のない大講堂から出火。新校舎の2階はほとんど焼け落



ちてしまった。寄宿生全員無事だった。このときの風間夫妻の落ち着きぶりは大したものだったと思う。

その後、焼けた校舎の改築、空き地に新校舎増築で、今度こそ学校はだいぶ大きくなったが、年々増えていく在學生で、たちまちそこも狭くなってしまい、今度は関屋の金鉢山に私たちにとっては実にすばらしい学校と寄宿舎が造られて、私たちはそこへ越していったのである。見えない目であっても、瞼を閉じると、寺裏の学校、寄宿舎。 関屋の松林に囲まれた学校、寄宿舎などなどが、はっきり思い出の中に生きてくるのである。

## 思い出の記

伊藤 武男 昭和13年卒

同窓会が生まれて70年…。私が母校を出て43年…。つかの間の時の流れに驚かされるが、近頃の私は老人ボケのせいか、昨日の出来事はすぐ忘れるのに、昔の思い出はたやすくよみがえってくる。

当時、金鉢山の校舎は、中学と商業の古材を利用して造られたので、今に比べればお世辞にも立派とは言えなかったし、グラウンドも猫の額ほどしかなかった。放課後バケツで浜から砂を運んで、造成工事に汗水流した日も多かった。戦争は満州事変が日支事変へと拡大して、物資不足が目立ち始めた頃なので、教材教具も乏しく、寄宿舎の食事量も量が減り、空腹を抱えて勉強する日が続くようになった。私を取り巻く環境は確かに貧しかった。

しかし、私はその中で朝夕の潮騒と松風の音に耳を傾けながら、不平もなく青春の火を燃やし続けてきた。あのころの母校には、個性の豊かな先生方が多かった。記憶の神様のようなカイゼルヒゲの高橋幸三郎先生…、謹厳で国語では県内一の実力者といわれた會田先生…、すぐ叱り、叩きはするが熱血漢の東條先生…、生活指導ではいつも姉のように世話をしてくれた阿部政枝先生など、秋田の片田舎から行李をかついで入学した私にとっては、その後の生き様に大きく影響した、忘れ得ぬ方々である。

今、母校は大きく成長した。金鉢山当時に比べると、校地は2倍半。校舎は3倍。教材教具は豊富に揃い、職員数は約4倍近くにもなっている。細かい点では不足もあろうが、教育環境はほぼ満たされていると見てよかろう。かつての砂や吹雪が所構わず舞い込む旧校舎。教師と生徒が一緒になって、古新聞を溶かし粘土をこねた教材づくり。真冬に備え、手を真っ赤にして働いた、薪運びや大根洗いなどの経験をしたものには、今の学園生活は、恵まれすぎているのではないかとさえ思われる。

この完備した施設ではぐくまれる生徒が、感謝と意欲と、困苦に耐える逞しさを持つ卒業生として、世に送り出されるよう期待してやまない。

## 母校の思い出

藤田 秀雄 昭和17年卒

### 野球と西瓜

私は昭和17年、第15回の卒業生です。もちろんあの懐かしい、関屋金鉢山時代の母校です。野球にあげ、野球に暮れたといっても過言ではないほど、野球一筋に10年間を過ごしたようです。

ある試験の前の日でした。例のごとく数人でボール遊びに興じていましたところ、突然「お前たちは、なにをしているのだ。明日明日試験だというのに、そんなことをしていて、んーんー、ばか者めが、すぐ舎へかえって勉強しろ」とこっぴどくお目玉を頂戴した次第でした。誰だろう、その先生は当時鬼とかじじいとかの異名で通っていた會田先生の声でした。みんな震え上がってすこすこと舎へ戻ったものでした。

当時の野球といえば、はなはだ幼稚で三角ベースでした。ベースは講堂からグラウンドへ出るところに、足ふきのマットがおいてありましたが、それを持ち出してベース代わりに使っていました。ハンドボールのようなボールをピッチャーが転がし、バッターなる人は足でけっぼくっていました。いわゆるけっぼり野球です。雨天の日などは講堂か舎の娯楽室で行いました。娯楽室にやる時は点字紙の書きほぐしを、何枚か重ねてひもで結わえ、それを板きれや棒きれで打っていましたからたまったものではありません。窓ガラスをだいぶ割ったものです。その都度ジャンケンに負けたものが、結構上手に勝手なテンポをこいて先生に謝りにいったものです。

次は大事件です。丁度食糧事情ままならぬ時でしたから、空腹空腹の毎日が続きました。ある消灯後、悪友5、6人示し合わせてグラウンドへ集合。いろいろと協議の結果、衆議一決、裏の畑の西瓜をちょろまかして、一時の腹の足しにしようとして決行したのです。あの時のうまかった西瓜は、一生涯忘れられないでしょう。グラウンドの垣沿いに並べてあった椅子の角で西瓜を叩き割り、配分して、その皮は椅子の下を掘って埋めたものです。卒業した夏、あまりにもうまかった西瓜の味が忘れられなかったこととみえて、下級生は毎夜それを重ねたらしいのです。とうとう持ち主は業を煮やし、ついにばくられて、職員室へ突き出される結果と相成り、上級生二人が1年間の停学という制裁を与えられた結果となった次第でした。その尻拭いで当時長岡にいた私まで職員室に呼び出され、こっぴどく謝罪させられたのにはだいぶ慚愧の念にかられた思いでした。

しかし私だとて、野球や西瓜泥棒で終わったわけではありません。何しろ青春の真っ只中、ご多分にもれず恋もしました。恋愛なるものも経験しました。そして失恋もしました。ラブレターも何枚か書きましたが…。結局は実らず、これこ

そ私の片思いであったようでもあります。

思い出は尽きません。一冊の本にでもなるくらい思い出はあるのです。しかし紙面も限られておりますので、最後に本会の70周年を祝い、今は亡き諸先生と諸氏に頭を垂れ、ますますの本会のご発展を祈りつつ失礼いたします。

## 入学当時の思い出

瀧沢 ミネ 昭和18年卒

私は当時関屋にあった新潟盲学校に入ったのは、昭和11年の4月であった。父と母に連れられて家を出た。大崎駅から汽車に乗って、吉田駅で越後線に乗り換え、関屋で降りた。私は母に手を引かれて、父の後に付いていった。玄関へくると風鈴がなっていた。私たちは学校へ入った。大勢の人がいた。私はこの人たちも私と同じに目が見えない人たちであろうかと思ったら、半分うれしかった。でも内心はさみしい思いであった。明日は父も母も帰ってしまうからである。知らない所へ来て、知らない人と一緒である。言葉はわからない。右も左も知らない子供である。父、母が帰ったあとは、さみしくて涙が出た。私は、来なければよかったなあとと思った。広い大きな部屋で、どっちが押入か入り口かさっぱりわからなかった。私と渡辺利枝さんと、部屋の中を騒いでいた。井口タカさんと五十嵐クヨさんはじっとしていた。渡辺利枝さんは、姉さんがいるからさみしそもなく、五十嵐さんと井口さんは、私より年上だったから元気である。私は一番さみしがり屋であった。そしてしばらくして学校も慣れ、言葉も覚え、自由に遊べるようになった。春の遠足、音楽会、童話会といろいろな楽しいことがあって、さみしさは消えていった。

やがて夏になった。7月1日から20日まで海水浴である。はじめて海に入ったときは波が来て怖かったが、保母さんや先生から泳ぎを教えてもらって、海はおもしろくなってきた。20日からは夏休みになった。私は体が弱いので残された。部屋の人みんな帰っていった。上級の女子も男子も残った人がいたが、1年生で私一人くらいである。はじめての夏休みなのに残念やらさみしい思いであった。午後は、私たち残った人たちは海水浴である。通学生も来た。午前中はなにをしたか覚えていない。8月になって私も父が迎えに来て、家へ帰った。はじめての夏休みは楽しかった。8月31日の日、みんなと一緒に学校へ帰ってきた。

2学期になった。授業が終わると運動会の練習である。はじめての運動会なので楽しかった。ある秋のことである。私たちは夕ご飯を食べて、裏の松林へ月見会に出かけた。草原で腰を下ろして、先生の話や余興を聞いていると、いろいろの虫の声。海岸からは波の音が聞こえてきた。楽しく遊んで、帰ってきてすぐ私は寝た。疲れていたのによく眠った。すると夜中に「火事ですよ、早く起きなさい」といって起こされた。私はびっくりして起きて、素早く服を着て廊下に出て、避難縄につかまって外へ出た。外へ出ると変なおいと、気持ちの悪い音が聞こえた。外は寒いのに、あの音を聞いて背筋がざわざわした。海岸近くまで避難し

た。私は、もし学校が焼けたらどうしよう、子供ながらも心配で怖かった。そして早く火が消えるように祈った。

そして、もう火が消えたから帰りましようとおっしゃったので、私はほっとした。私たちは学校へ帰ってきて寝た。朝までぐっすり眠った。私は学校へ入って怖かったのは火事である。昔の学校の思い出を書いてみました。

## 金鉢山思い出草

中川 童二 昭和26年卒

終点でバスを降り、競馬場の方向へ前進すると、右側にかつての新潟盲学校。左手にやや小高い金鉢山がみえてくる。昭和22年から3年間、40歳を過ぎた私は、この盲学校の高等部の生徒として通学していた。終戦の直後で、乏しい私たちは、アメリカの慈善団体（ウラ）から、ウラ物資を送られていた。かつての敵国から情けをかけられるという僻み心もあったが、なにを貰っても嬉しかった。おかしかったのは古ネクタイの束が送られてきたことだ。あちらでは小学生でもワイシャツを着て、ネクタイをしている。送る方では結構役に立つと思ったのかもしれない。当時ネクタイが必要なスタイルは誰もしていなかった。私などは、警防団の服装で通学していたのだ。「寝間着の紐にでもしたらどうかしら」と樋口先生がいった。ネクタイといってもよれよれで、紐といった方がよいようだ。口の悪いやつが「ふんどしの紐にもならないやー」といった。寝間着の紐にするにしても片方が細くて、片方が幅が広いのだから、ピンとこない。とにかく私はそのネクタイを2、3本と冬オーバーとを貰った。これは、ばかでかくて、それを私が着ると、子供たちは北極グマのようだといっではやし立てた。手の指が隠れてしまいそうな袖の長さだ。私は、これを渡してくれたときの樋口先生の言葉を思い出した。「これは絶対に売ったりしないでくださいよ。」私はこれを着て歩かなければならないのかと、啞然とした。

洋服の仕立てをしている近所の人に訊いてみると、体に合わせて直すとなると、相当費用がかかるということだった。そんな時に北蒲原で農業をやっている甥が訪ねてきて、このオーバーを見つけると「これは素晴らしい。おらに譲らんかね」と言った。大男の甥には寸法がぴったり合いそうだ。樋口先生の言葉が私の頭の中で首を振った。「売るわけにはいかないんだ。」「そんなら米と取り替えねえかね」樋口先生は売ってはならぬと言ったが、米と取り替えてはいけないとは言わなかった。私は飯を食い足りない顔をしている3人の子供を見て、勝手な理屈を考えた。私は「ウラの皆さんごめんなさい。樋口先生ごめんなさい。」と心で詫びて、甥の顔へ頷いてしまった。

## 金鉢の母校の思い出

木村 馨 昭和31年卒

7月に行われた、宮盲の同窓会には、私が最初に受け持ったS君が、一番乗りをしてきた。「馨先生ですか」と懐かしげに語りかけてくる。勤めてまもなく彼から「この他国者め」と言われたことを思い出す。そういえば、勤めてはや24年になるが、いまだ本校の沿革は定かではない。毎年10月10日に聞いた母校の沿革が、心の奥に刻み込まれているのである。十数年間の学舎には多くの思い出がある。それらは学校や先生方に迷惑をかけたこともあり、今もおそらく語り継がれていることだろう。ここには学校と寮の思い出を書いてみたい。

私が最初に校内弁論大会に出たのは、中2の時、確か入賞したように思える。それ以来ある時は飛び入りで、ある時は基準弁論にと数回出たように思う。専1の時には選ばれて、市内高校弁論大会で優勝した。それは私の力というより、当時の学校の弁論ブームとその水準の高さによる。大会の2週間前から、講堂は練習の順番を待つ人が続いていた。そして練習の終わる度に指導や注意を受ける。順番を待ちきれない人や、しごきを嫌う人たちは、あちこちの教室でそれぞれ練習に励んでいた。私の論旨もそんな雰囲気の中に練り上げられて、優勝の栄冠につながったものと思われる。

宮盲に勤めて2年目、S君の同級の女生徒がクラスから選ばれた。目立たないおとなしい生徒だった。論旨から練習まで面倒を見たところ、別科生ながら優勝したのである。このことがきっかけとなり、私は数年前まで弁論の指導を引き受けざるを得なかった。この間、拓大の全国高校弁論大会で第2位になった生徒もいる。

寮での思い出は倶楽部長の頃のことである。将棋愛好会を作ったところ、会員が大勢集まった。棋力に応じてA、B、Cに分け、各級とも総当たりのリーグ戦にした。そうになると将棋盤が足りない。舎監長に無理に頼んで増やして貰った。A級の1位になると名人に挑戦できる。各級の1位の方は、上の最下位の人と入れ替え戦をして勝敗を決める。戦績は模造紙に書き、食堂の壁に貼った。最初のリーグのA級1位が名人に、先輩高橋がなり、2期のリーグ戦では、私がその挑戦者になったが敗退した。3期は黒鳥先輩が挑戦者になったが、高橋先輩は卒業まで名人位を守り通した。

数年前、本校に必修クラブが発足し、私は将棋クラブの顧問になった。そして同僚にしごかれて、やっと昨年初段になったが、これは四十の手習いに近い。実は、高等部時代あまり熱中して、父から禁止令が出たからである。それから二十数年将棋から遠ざかっていた。私に将棋の手ほどきをしてくれた人は、笠原先輩



である。それから一カ年間、誰にも勝てなかったが、勝ちだすと将棋の面白さがつかめるようになった。そんな頃、黒鳥、土田、高橋の諸先輩が好敵手として現れたのである。創立 70 周年記念式に、私の入会式後 26 年ぶりに出席してみたい。

## 在学中の思い出

小山 啓吉 昭和31年卒

私は昭和18年4月初等部1年に入学し、31年3月、高等部専攻科を卒業するまで、13年間関屋の寄宿舍で生活した。この間、心に残る思い出は数多く、今でも時折当時の教室や舎室が、共に過ごした仲間が、昔のまま夢に現れたりして、とても強い郷愁に誘われることがある。

子供の頃は、きかん坊そのもので、何人かの先生を困らせたこと。あるいはハーモニカやレンズの泥棒にされてしまったり、食糧難で空腹に耐え、燃料不足で寒さに耐えるなど24、5年頃までは、苦しくつらいことの連続であった。そしてたいていの喧嘩では、売られたものでも、いつも仕掛けたものと誤解され、どれほど先生や寮母さんに叱られたことか、それは私が小学生時代しゃべることが苦手だったため、損をしたのではないかと思う。

私は家が貧乏で、学校へ支払う費用以外はほとんどもらえず、衣服も思うに任せず、そこで、中2の4月を期してある決意をしたものである。それは身体を鍛え薄着で通すことであった。当時はアルバイトもできなかったのも、とにかく最初は朝の運動と乾布摩擦でスタート。しかし、2年経つと冷水摩擦に変え、さらに2年の後、毎朝水をかぶることにし、卒業までやり通した。でも、その結果寒中でも丸首シャツと上着、下もズボン下なしで通した。高等部に入ってから、ぼつぼつアルバイトが出来るようになり、日用品、学用品だけでなく、学生服以外の衣服も自分でまかなうようになり、修学旅行費も自前でやった。こうした貧乏との戦いは、当時私一人ではなかったようだ。

26年以後は、特にスポーツに打ち込み27、8年と相撲の補欠として二年もふんどし担ぎをして、ようやく3年目、4年目に2回、正選手として出場させて貰い、団体優勝を守り通し、個人でも準優勝と優勝とを獲得させて貰ったことは、なんといっても私の在学中、最も明るく楽しい思い出となった。そして卒業式も近づいた3月16日の午後、相撲仲間がたまたま入浴で一緒になり、誰かが「おい、天気もいいし相撲をとろうか」と言い出し、5人が「そうだ」といって風呂から上がり、まわしを締めてとった。これが私にとっては土俵上での最後の相撲となってしまった。このときのメンバーは私のほか、小林四郎先生、田坂正美、渡辺善三郎、清野雅昭の5人であった。

こんなこともあった。22年、6年生の5月、自由に意見が投書できる投書箱があったので、私は当時西階段といったと思うが、男子便所の傍の階段を、使用していない小学部高学年になると、週一度ぐらいの割に掃除をさせられていた事を不合理に思い「小学生の使わない、階段掃除はやめさせてください」と投書

したことがある。このころはまだ軍国的、封建的名残りで、子供の意見などはもの数に入れず、耳をかさない傾向のため、投書箱が設けられていたように記憶している。しかし普段は人の悪口、特に男女間の暴露みたいなものが多かったとき、私の意見が公表されるやどよめきが起こり、それからは「あの掃除は伝統的に受け継ぐもの、今更なにをいうか」「どこのどいつが生意気なことを言っているのか。徹底的に探して、のしてしまえ」などと恐ろしい声が耳に入ってきた。しかしそこは無記名の良さで、危害は免れたが、でも正当な要求なので、幹部は役員総会を開き、皆を説得して、ついに1学期いっぱいその階段掃除から解放されたという、うれしくもあり恐ろしかった思い出も、懐かしく思い出されてくる。

## 盲学校の思い出

服部 ミチ子（旧姓：佐藤 ミチ子）

昭和41年卒

それは私が6年生の秋のことでした。その年の同窓会のあとは、引き続いて二日ばかりの連休があることになっていました。

連休となると、普段の土日にはほとんど帰らない人たちも帰り、多く帰ることになります。残るのはほんのわずかです。もちろん私は家が小千谷ですから、その頃としては交通時間からいってもかなり遠い方に入ります。ですから夏、冬、春の休み以外はもう帰れないものと心得、似たような仲間も結構いましたし、近い人たちが帰るからといっても、さしてうらやましくもなかったように覚えています。ところがその連休に限り事情が違うことになったのです。

いつも長期の休みから帰ってくると、人一倍家を恋しがり、ホームシックにかかって、2、3日はメソメソばかりしている、私のことをよく知っている受け持ちの寮母さんが、私を喜ばせようと思ったのででしょう。「今度の連休は、ミチ子ちゃんと一緒に小千谷の家へ行こうか」と言ってくださったのです。私は夢かとはばかり驚き喜びました。そうして、それからは毎日故郷の秋のことを一つ一つ思い浮かべては、楽しみにしていました。はさ場に架かっている稲の甘いにおい、甘酸っぱいやマブドウそれにアケビ、自在鉤に架かっているやかんの中でコトコトと茹だる栗の音など…。もっともっと思い出したくても、私が盲学校に入るとたんに、秋は私の前から遠ざかってしまったのです。家は農家でしたから、私は小さいときから春、夏、秋は毎日のように父や姉に連れられて、田んぼや畑へ出かけて行きました。そして冬は、沢山降る雪の中で過ごしました。ですから子供だったとはいえ、その時々季節感はしっかりとつかんでいたように思います。それが、学校の寄宿舎に入ったとたんに、春といっても春らしくない、夏といっても夏らしくない、それがとても寂しかったものです。それでも春、夏、冬の場合は、長期の休みがありましたから、多少季節を味わうことが出来ました。

春休みの時には、雪解けの水が崖のところをチョロチョロ流れて、その傍へ行くと何ともいえない新しい土の匂いがしました。香り高いフキノトウを摘み、ツンと立っているツクシをとってウサギに食べさせたりもしました。夏休みには、ジャガイモ掘りをしました。莖を持って引き抜くと、根元からジャガイモがころころと転げ出て、そこを掘るとまだまだ沢山のジャガイモがでてきました。植えて、草を取り、大事に育てていく苦労を知らない私は「魔法みたいだね」といってよく笑われたものです。一休みしたとき、たった今畑からもいだ西瓜、メロン

などを鎌でざっくりと大きく割って、かぶりついて食べたのも、やはり夏休みでなければ経験できない楽しみの一つでした。そして、冬休みの時には、坂道が多く雪深い私の田舎では、道が即楽しい滑り台でもありました。

そこにそりやスキーを持ち出して結構楽しく遊びました。正月には父が杵を持って餅をつき、石臼でゴロゴロと豆を挽いて、芳ばしいきな粉を作りました。私はこのできたてのきな粉をかけて食べる餅が大好きでした。けれども秋、これだけは盲学校に入ってから、そのひとかけらも味わうことができなかったのです。ですから、連休に帰れるということは、非常に大きな喜びだったのです。「秋の精が私を見て、どんなに懐かしがるだろう。秋の精はきっと手がちょっと冷たくて、背の高い優しいお姉さんに違いない」なんて…。今思い出しても、あの時ほど自分が想像力豊かであったことはなかったように思います。

結局、寮母さんの都合が悪くなって帰れないことになりました。「これでいいんだ」と、そう自分に言い聞かせながらも、やはり涙があふれて、どうしようもなかったことを覚えています。

最近の盲学校では、土曜日になると、どんなに遠い人でも、それぞれの家庭に帰すとか…。これを伝え聞いたとき、私は思わず、「いいね、よかったねー」と、何度も何度も繰り返さずにはいらませんでした。

## 今感じていること

池田 邦紀 昭和42年卒

私は1962年に新潟盲学校に入学した。その前、1年間入院生活をしていた。その時病院の先生から、もう治らないから盲学校へ入った方がいいのではといわれたが、私は入ることを拒んだ。それは、盲学校は暗い陰湿なイメージが私の中にあっただので、そんなところには入りたくなかったのだ。このようなイメージを私に与えたのは、一般学校の教育と、社会全体が、障害者に対して差別と偏見を、子供の頃から自然に植え付けていたからだと思う。しかし、盲学校に入ってから、私は障害者に対する見方が大きく変わった。みんな明るく生き生きして精一杯がんばっているのだ。

私自身、視覚障害者になって、いろいろ苦しいことを経験してきた。この苦しみは、社会的に作られたものが多くある。こんな、障害者が生きていくことに大変な世の中は、おかしいということが、盲学校に入ってわかってきた。そして、障害者自身ももっと声を大きくして、一人の人間として生きる大切さを、多くの人たちに知らせなければということも、学校生活の中から、友人、先生から知らされた。私は今でもその立場で、障害者がこの世の中に生まれてよかったという社会にするために、多くの仲間と一緒に活動しています。今、私は鍼灸を専門として仕事をしているが、この基礎は盲学校で学んできたものです。卒業するとき、これから社会に巣立って、十分鍼灸マッサージを業としてやっていけるという自信と誇りをもっていた。しかし、社会はそんなに甘くはない。今思うことは、学校の授業の中で、理療業で、それぞれが病める人たちを、自信をもって治すという、学と技術を身につけさせることが大切だと思う。今では卒業しても、病院には視覚障害者は雇ってくれない。長年伝統的に受け継がれてきた、東洋医学の思想と技術を、十分身につけさせることこそ、自立できる道なのではないだろうか。そして、一人一人の個性、条件を生かした生き方、仕事に就ける進路指導を学校でしてほしい。そして盲学校が卒業生の憩いの場、センターとして開放し、日進月歩進む医学のこと、福祉のことを、先生、先輩、後輩と気軽に話し合えるようにしてほしい。名実共に私たちが盲学校の卒業生といえることを誇りをもって言いたいものだ。

## 学生時代の思い出

味方 富子（旧姓：湯田 富子）

昭和44年卒

昭和44年に卒業して、十有余年が夢のように過ぎてしまいました。4歳と1歳になったばかりの子供を相手に、忙しい日々を送っております。

お世話になった先生方、いかがお過ごしでしょうか。共に学び、遊んだ皆さん、どうしてですか。いつも思い出しては懐かしんでおります。

医師の誤診という、考えられないような原因で失明した私は、3年もの治療の甲斐もなく、盲学校の5年生に転入することとなったのです。昭和34年両親に連れられた私は、当時関屋金鉢山にあった古い校舎を訪れました。親元を離れなければならない寂しさと、心細さが交錯して、流れる涙をどうすることもできませんでした。母も泣いておりました。母にすがりついて又一緒に家に帰り、しばらくの間通学しました。あれから二十有余年、今もなお、悲しかったあの日のことは忘れることができません。

何かにつけて不慣れな私に、何かと親切におしえてくれた友、そして、身の回りのことに心を配っていただいた優しい〇寮母先生のおかげで、楽しい毎日を送ることが出来ました。近くの金鉢山の公園で遊んだり、すぐ近くにあった点字図書館から本を借りて読んだり、お人形さんに洋服を作って着せたり…。又、トイレに幽霊がでるとか、女装した男性が、高等部女子の部屋に忍び込んだことがあるとか、夢遊病者が真夜中さまようなどという話もあり、人一倍臆病私は、夜になるのがたまらなく怖かったことが、今思えば懐かしい一コマです。

あの砂浜での海水浴も忘れることが出来ません。当時はまだ砂山も、かなり広い砂浜もありました。ある時など、友と手を取り沖へ向かったところ、急に高波が来たため、方向を失い、あわてて溺れかけたこともありました。以来水恐怖症になったような感もなきにしもあらず…ですが。

中学部も又楽しい時代でした。担任のK先生はとても優しく、お母さんのような感じでみんなに慕われておりました。放課後や夕食後よくフォークダンスをしたり、卓球をやったり、又寮母先生から本を読んで頂いたり、いつも男女一緒に遊んだものです。はじめて異性を意識しはじめたのもこのころだったと思います。うち明けることもできず、ただ一人小さな胸を痛めたものでした。片思いに終わった本当に淡い初恋でした。

本校が山二ツに移転し、寄宿舎が出来るまでの間、バス通学となりました。給食のほとんどはサンドイッチと飲み物で、各教室でいただきました。寄宿舎が完成したのは、中学3年の頃だったと思います。周りは田や畑が多く、夜になる

とコウモリが迷い込んだり、蚊や虫が多く、蚊帳をつって寝たものです。

高等部になってまもなくです。あの恐ろしい新潟地震。お昼休みに教室掃除をしているときでした。グラグラグラ「おい、誰だ。貧乏揺すり」と、ある男生徒。ドドド、海鳴りにも似たすごい音と共に激しく揺れ、何かに掴まらないことには立っていただけませんでした。全員グラウンドに避難、気が付いたときには、私は箒をしっかりと握っておりました。みるみるうちに空が真っ黒になり、昭和石油の火災ですが、恐ろしい思いでした。学校は幸いけが人もなく、被害も少なかったようです。

高等部も又すばらしい時代でした。5年間の生活は、私の生涯にとって忘れることのできない、実に貴重な時代であったことを喜んでおります。私がこうして、今日あるのも、お世話になった先生方や皆様方のおかげだと、心より感謝しております。

思い出は尽きることなく蘇って参ります。今夜も雨が降っております。山ニツ校舎の放送室前の中庭にあったアジサイや、用務員の宇田さんが丹誠込めて手入れをしていた、あのバラや百合などの花々、今年もきっと見事に咲いていることでしょう。私の学生時代の思い出は、生涯私の胸の中に生き生きと燃え続けていくことでしょう。

最後に、大変お世話になった塚本校長先生はじめ、亡くなられた諸先輩方々のご冥福を、心からお祈りすると共に、皆様方のご健康とご幸福、そしてご活躍と並びに母校の発展をお祈りいたします。



## 焼き物って難しいな

堀 陽子 昭和55年卒

いつの頃でしょう。学校に陶芸用の窯とろくろが購入され、授業やクラブ活動の中に陶芸が取り入れられた時期がありました。毎日工作室へ掃除にいくと、ろくろの周りに先生方が何人かおられ、灰皿や湯飲みなどを作っておられたようです。

私も中学の頃、灰皿のようなものを二つ焼いたことがあります。週1回の美術の時間になると、体操着を泥だらけにしながらか粘土をこねるのです。私の場合、全盲ですし全くの初歩なので、粘土を紐状にし、それを重ねて形にする方法を教えていただいたのですが、手が不器用で、美術など大の苦手な私のこと、紐のつなが目が切れてくずれてしまったり、やっと形にはなっても、すごく不格好なのです。ついに匙を投げた私は、先生に少し手直しをして貰い、窯に入れて貰ったのですが、なんと焼き上がりのすごかったこと、灰皿はおろか容器の形にもなっていなかったのです。次の年は、今度こそまともの皿を焼こうと、がんばった甲斐あって、釉薬まで塗って貰い、ようやく皿らしいものを焼き上げ、文化祭にも出品しました。しかし、あの時のつらかったこと。終わったあといくら手を洗っても、土のベトベト、ザラザラした感じはとれないし、教室は汚れて、掃除しにくいし、作品を焼き上げる喜びよりも、早くこんな粘土細工なんか終わらないかなあとという気持ちの方が、とても強かったようです。

あれから何年か経ったいま、私の作品はどこへしまい忘れたのかわからなくなりました。しかし、あの時の貴重な体験は、きっと生涯忘れることはないでしょう。

## <記念講演>

### 人の身体、その合理と不合理

加藤 克知

「人」の直接の祖先にあたる動物と考えられる「ラマピテクス」が、地球上に出現したのが、今から 1,800 万年前のことである。もちろん突然わいて出たのではなく、チンパンジーやゴリラといった現在の類人猿との共通の幹である「ドリオピテクス類」から分かれたと推測されている。引き続いて「オーストラロピテクス（約 7~800 万年前）」、「ホモ」エレクトスないしは原人（約 50 万年前）、ネアンデルタール人として知られる「旧人（約 10 万年前）」、さらにクロマニヨン人に代表される「化石原生人類（約 6 万年前）」へと、猿的な人から人的な人へ早足で進化の歩みが進められてきた。そして今、我々「現代人」が、破壊されつつある自然と、自ら作り出した巨大文化の中で生活する時代である。

「人」の歴史は、地球の歴史の数十億年、生命の歴史の 20 億年に比べれば、格段に短いものであるが、それでも肉体的にも精神的にも「人の本質」なるものを一応のレベルまで育むには十分なものであった。生物の進化は、環境に対する適応、不適応（適応現象）の結果として、進行していくと考えられて、概ね誤りでない。この意味で「人」の身体の構造や機能（形態学的型とよぶ）は、進化と共に環境や生活様式（生態学的型とよぶ）に対して、より一層の合理性を獲得してきた。（改造進化）「人」は四足動物と違って直立して二足で歩くが、これは「人」特有の生態学的型であり、身体の構造の多くは、この直立二足歩行に適するように変化してきている。以下このことについての具体的例をいくつか紹介する。

（1）脊柱の生理的彎曲→ 脊柱を頸部で前彎、胸部で後彎、腰部で前彎させることによって、内臓など身体の前方にあるものとのバランスを保ち（すなわち重力線を前の方に移動させる）直立を容易にする。この湾曲は、直立に伴って出現するもので、直立の出来ない乳児以前には生じない。

（2）骨盤の形 → 四足動物の直線的な骨盤のようなスマートさはなく、幅が広く、上下に短くなっている。これは直立によって落ちてくる内臓の受け皿としての役割をすると同時に、直立した状態で歩くための、強大な筋肉群の起始部を

提供し、一層頑丈さを増す。

(3) 下肢の関節の特殊化 → これらはいずれの関節にも、大なり小なり見いだせるが、股関節の靭帯群は、直立位に対してきわめて適応的構造を見せている。

(4) 足底の構造 → 「かかと」と「つちふまず」が形成されている。この何気ない構造は、体重を足底の四方に分散させることによって、長時間の直立位を可能にしている。

(5) 頭の形態 → 直立位に伴う頭の変化にも著しいものがある。脊柱との関節部であり、脊髄の通路でもある大後頭孔の前方移動、胸鎖乳突筋の発達、後頭部の形状の変化がその例である。

(6) 立体視 → これは直立二足歩行に伴うというよりは、むしろ「人」の祖先が、樹上生活をした名残と考えられる。主として、眼窩の前方への移動と、眼球軸の変化によっている。樹から落ちないようにきめ細かい配慮がなされている。

以上の変化は、主として直立という事に伴って「人」の進化の段階で徐々に獲得されたものであるが、このほかに、個体レベルでの比較的短期間で起こる変化（長身化ということがある）が認められる。変化を起こす要因は様々であるが、多くはこれらの要因に対する合理的な変化である。挙げれば際限がないが、

(ア) 頭の形や鼻の形と機構

(イ) 海女など潜水を職業とする人々に見られる外耳道骨腫、これは冷水刺激等が原因と考えられている。

(ウ) 下肢の筋の発達と、関連する通常大腿骨や脛骨の後面に見られる、直線上の隆起（第四稜）の形成で、扁平脛骨がその代表例である。

しかし、上述のように「人」の身体の構造が、全て生活に好都合に出来ているわけではない。不都合な部分も実に多いのである。これらの多くは当然直立二足歩行に伴った代償的な欠陥である。骨盤の変化による産道の複雑化と難産、脊柱を連ねて体重がかかることに起因する、腰痛や椎間円板の損傷、内臓下垂やヘルニア、静脈弁の未発達による痔などのうっ血性疾患の頻発などはその良い例である。こういった「人」の身体の構造の不合理性は「直立二足歩行」が未熟であり、まだ完成の域に達していないことを物語っている。その他の多くの形態的、機能的変異を考えあわせると「人」は現在でも、刻一刻と進化しつつある動物の一員なのである。

## 事務局便り

### 1 総会

記念式に先立ち、午前 10 時から総会を開きました。あいにくの悪天候にもかかわらず、約百余名の会員が、県内外から参集しました。伊藤会長代理、塚野顧問（新潟盲学校現校長）の挨拶の後、安澤正成、渡辺幸栄の両氏を議長団に選出し、次に議案を審議決定しました。

- (1) 会務
- (2) 55 年度決算および基本金調べ（別紙）
- (3) 56 年度予算（別紙）
- (4) 次期総会について
- (5) 役員改選

以上でしたが、主なものを次にお知らせいたします。

次期総会は、会則によれば来年度（57 年 10 月）に行うことになっているが、盛大に 70 周年記念を行った後でもあり、予算も逼迫しているので、58 年に繰り延べることにしました。

役員改選は、選考委員をあげ、捧梅次郎氏（昭和 6 年中等部卒 三条市在住）を会長に選出しました。（新役員は別紙）

### 2 式典

10 時 30 分から 70 周年記念式典を挙行いたしました。来賓には扇嘉家（前校長）、丸山博（元校長）、小池テル、阿部ミイ、大関隆昌、小林年子、中沢栄次、伊藤あやの旧職員の先生方や、塚野裕校長をはじめ、多数の現職員の先生方がご列席になりました。捧会長の挨拶の後、塚野校長、扇前校長から祝辞を頂きました。引き続き、長年にわたり役員として本会の育成と発展に尽力された、次の諸氏に、表彰状と記念品を贈呈しました。

表彰者氏名 …… 略

### 3 記念講演

11 時から 1 時間にわたり、新潟大学第 1 解剖学教室の加藤克知先生から「人の身体」その合理と不合理と題して、有意義な学術講演をお聞きしました。（要項は別紙）

### 4 祝宴

12時20分から祝宴を開きました。捧会長の乾杯に始まり、来賓の先生方からは、近況報告を兼ねた自己紹介をしていただきました。恩師を囲んで思い出に耽っている人々、旧友同士が肩をたたき合って笑い興じている姿、どの顔にも70周年にふさわしい満足の表情がうかがわれました。最後に丸山元校長の万歳三唱でめでたく祝宴を閉じました。

#### 新役員

顧問	・・・	塚野 裕
会長	・・・	捧 梅次郎
副会長	・・・	伊藤 武男
会計監査	・・・	本間 栄一、永井昭二
理事	・・・	略
評議員	・・・	略

#### 昭和55年度決算（55年9月から56年8月末まで）

収入総額 153,661円

##### 内 訳

55,285円	前年度繰り越し
30,000円	新会員会費
62,800円	東北電配当金
5,576円	雑収入

支出総額 85,644円

##### 内 訳

18,600円	会合費
50,354円	通信庶務費
16,690円	香料

差引残 68,017円

#### 基本財産調べ（56年8月末）

東北電力株式 1,270株

預 金 518,232円 （支出予定30万円『70周年記念事業費』  
158,500円 『東北電力新株引き受け分』）

昭和56年度予算案（56年9月から57年8月末まで）

収入総額 158,017円

内 訳

68,017円	前年度繰り越し
30,000円	新会員会費
60,000円	東北電配当金

支出総額 158,017円

内 訳

20,000円	会合費
40,000円	通信庶務費
30,000円	機関誌発行費
20,000円	臨時費
48,017円	予備費

会務報告

・・・略・・・

編集後記

同窓会創立70周年の記念号「船江の六光 第106号」をお手元にお届けします。

大変懐かしい方々や、懐かしい内容にあふれたものですので、隅から隅までゆっくり味わってお読みいただければ幸いです。何か感想やご意見がありましたら、係にお寄せください。なお、どんな原稿でも結構ですから投稿をお待ちしております。

編集に当たり、多くの原稿をお寄せいただいた方々や、発行に当たりご苦勞を頂いた方々にお礼申し上げます。

寒さがだんだん厳しくなって参りますので、ご健康にご留意ください。

(T・M)

誌名 「舟江の六光」第100号・第106号  
合冊復刻版

発行日 令和元年 6月 19日

発行者 新潟県立新潟盲学校  
同窓会長 渡辺 利喜男

印刷所

